

282  
17



始



282  
17  
F 5J 18

# 八大學と秀才

臣長谷場純孝閣下題字  
前宮内大臣土方久元伯題字  
文部次官福原錄二郎先生序  
やまご新聞記者平元兵吾氏著

東京日東堂書店發兌

282-17



八天  
學  
と  
秀才

大正  
1.11.20.  
内交

卷之五



卷之五

命

華

發



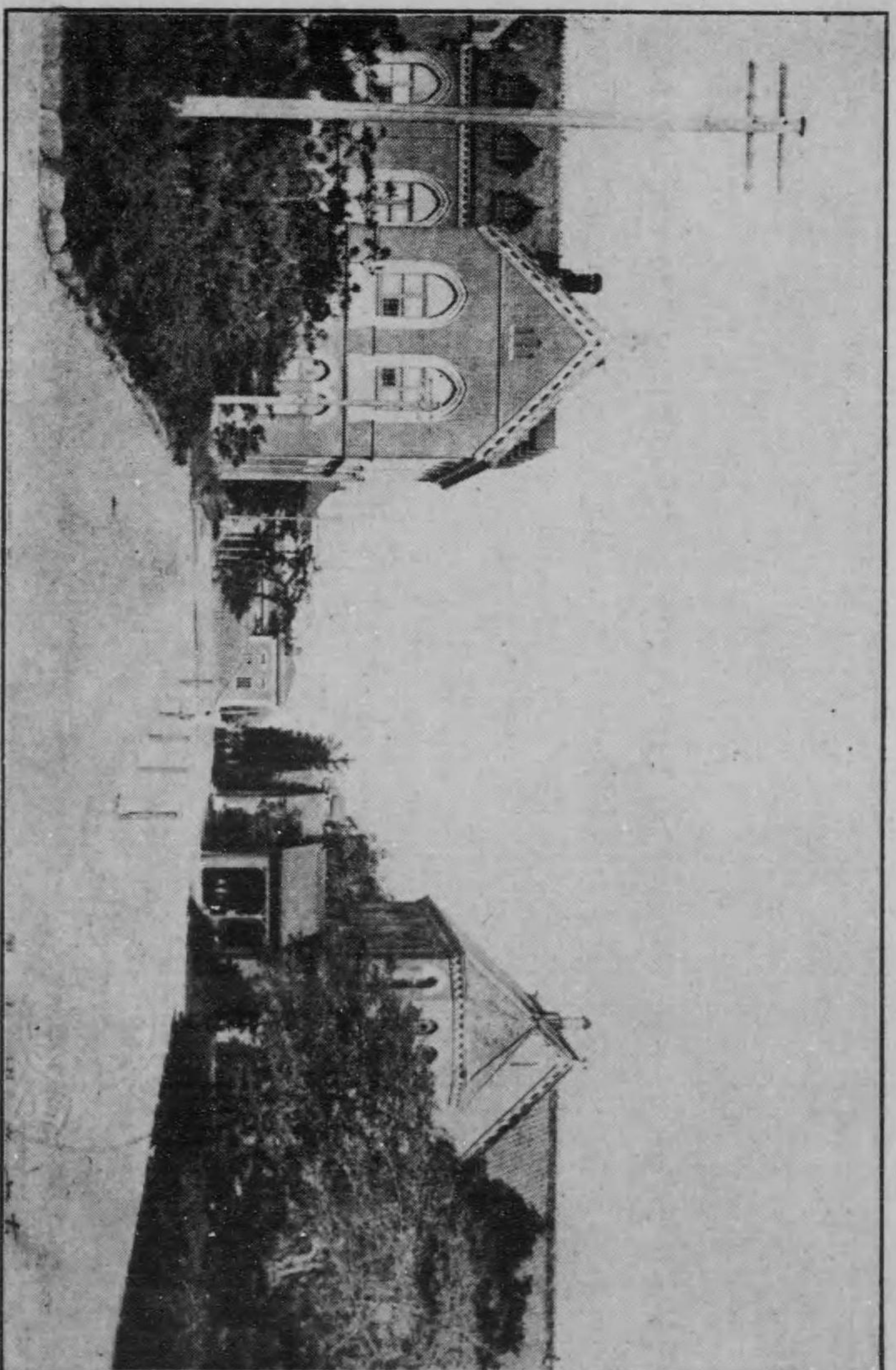
吐美

大正元年

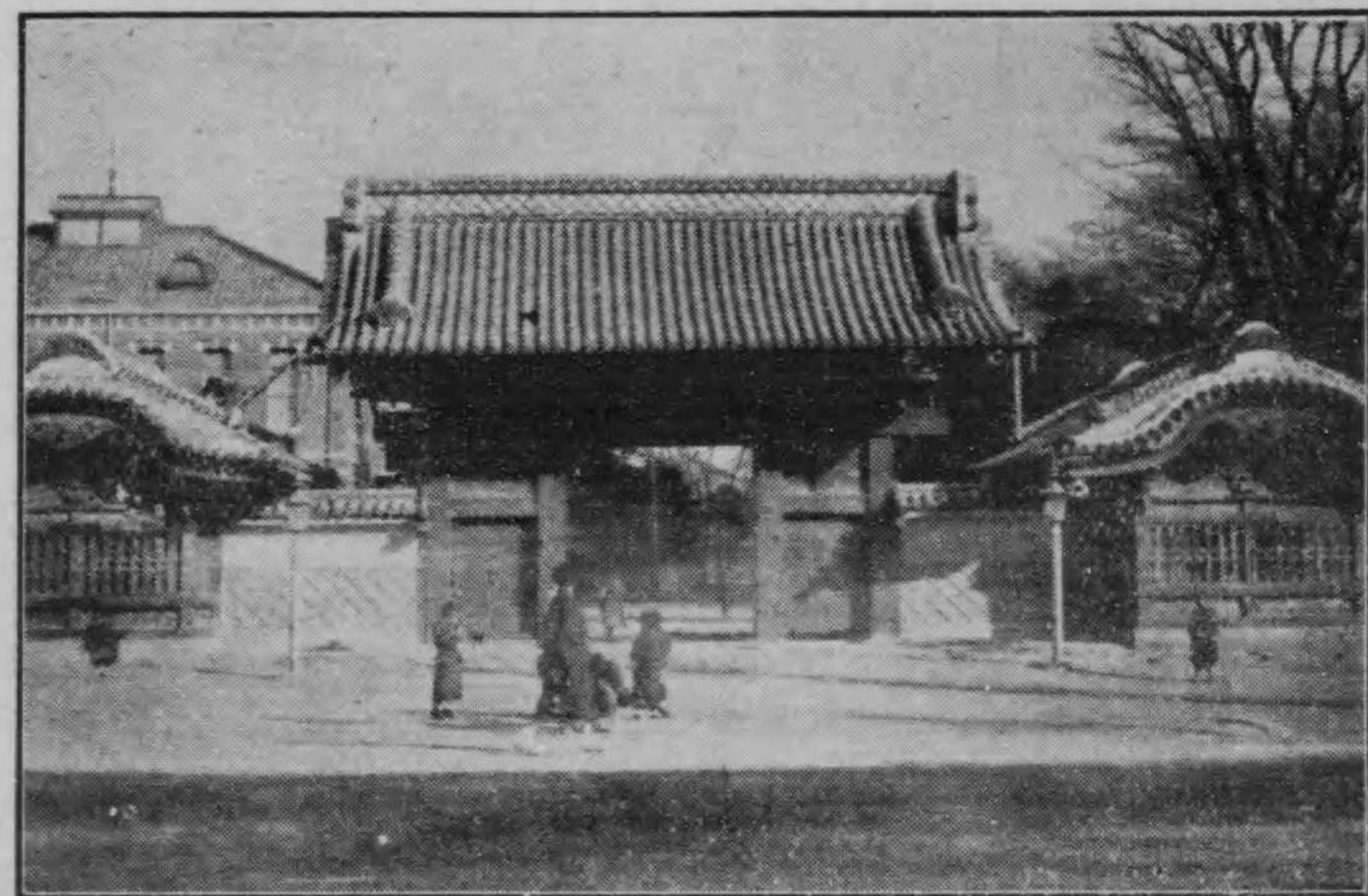
中秋

秦山題





(東京帝國大學)



(門赤學大國帝京東)



(門正學大國帝京東)

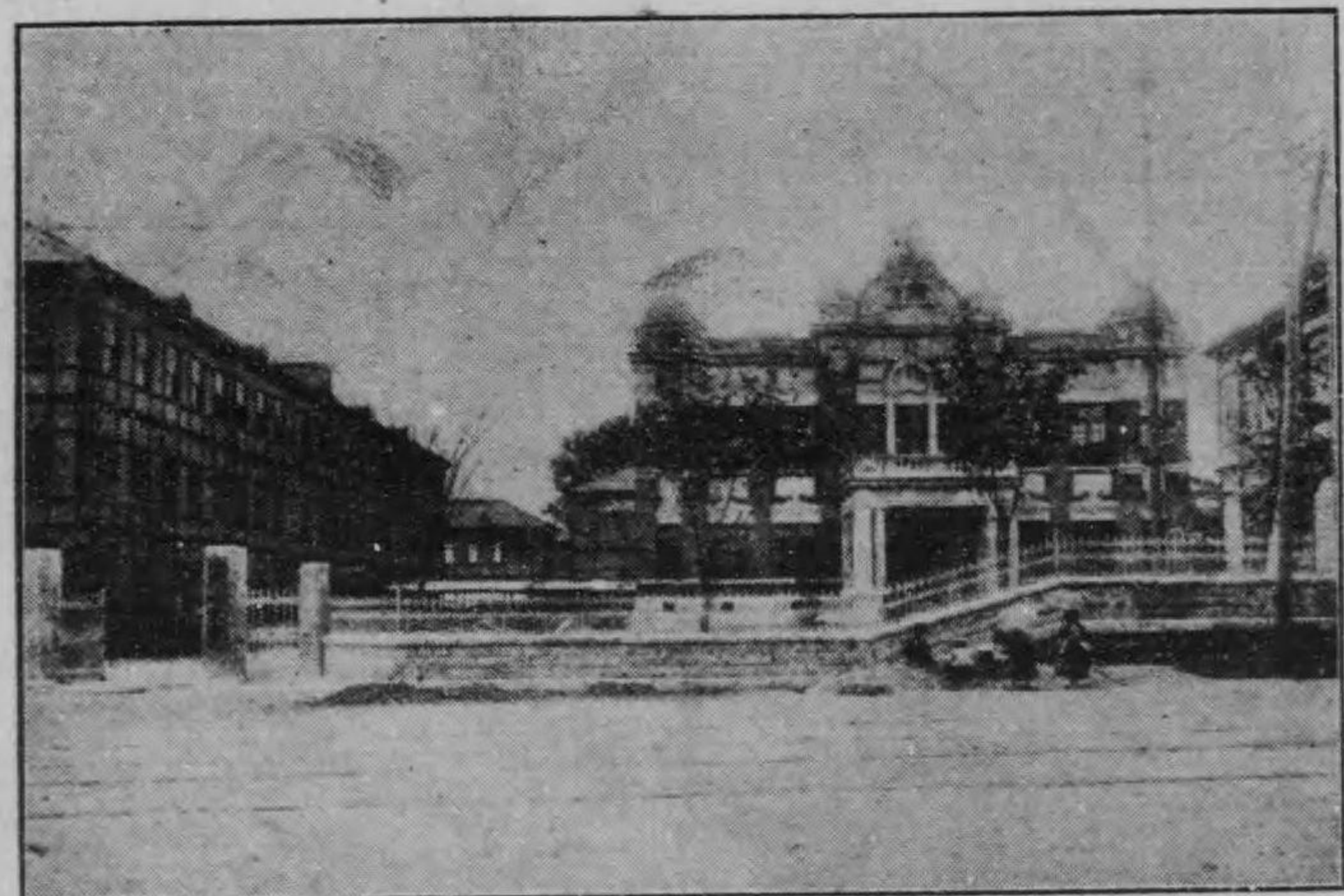




(學大田稻早)



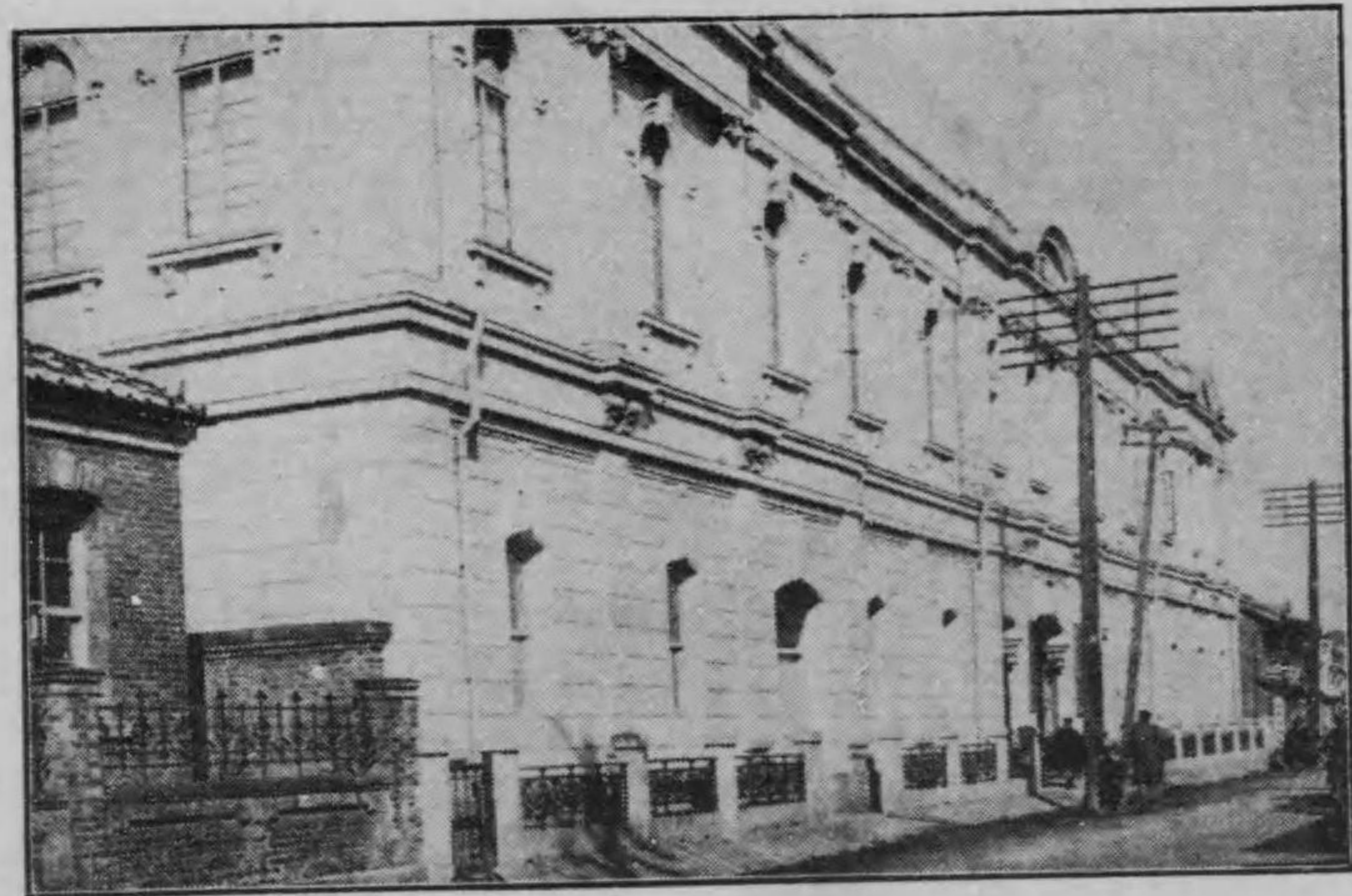
(學大塾義庶慶)



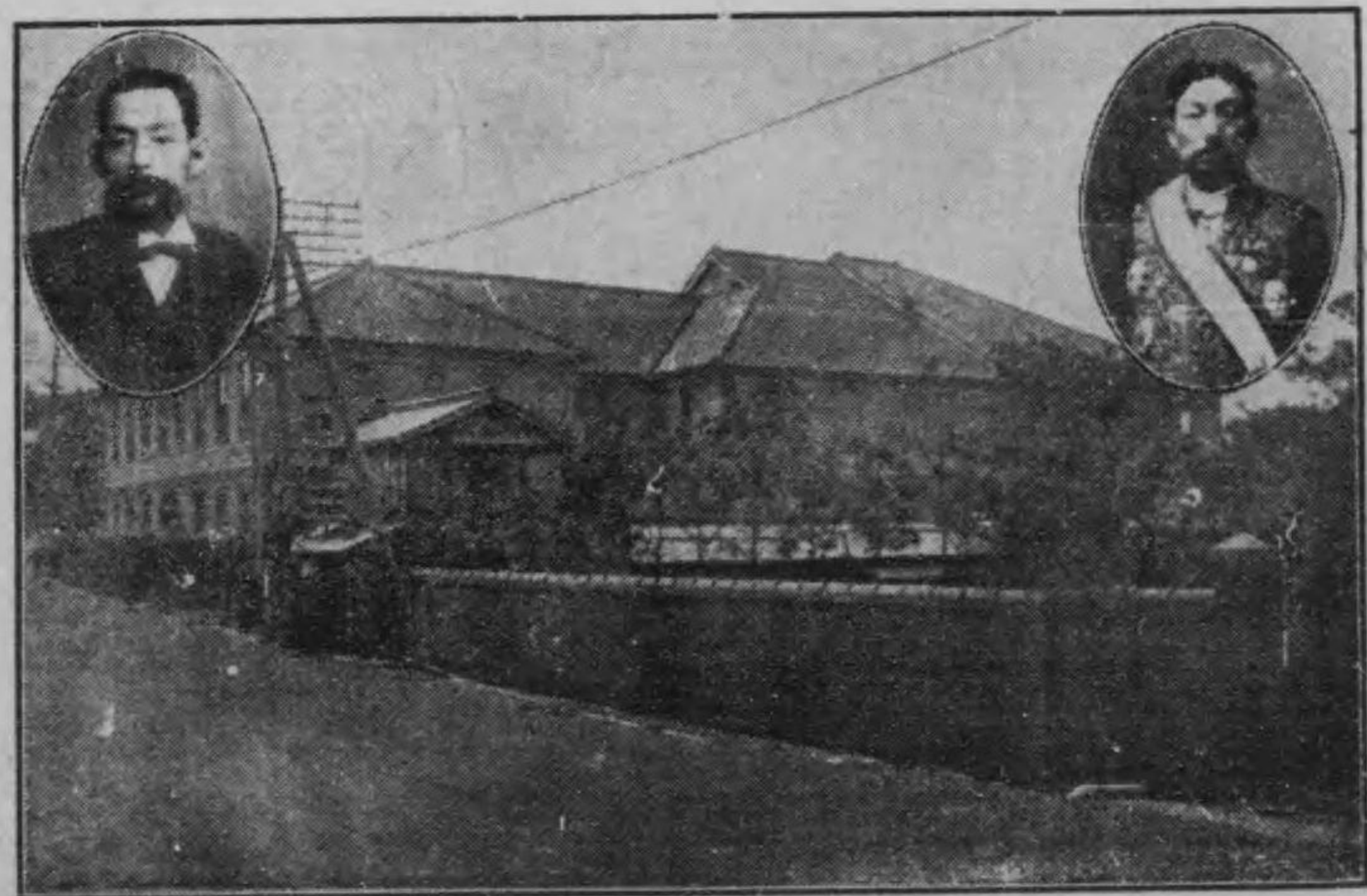
(學大治明)



(學大本日)



(學 大 央 中)



士博井富 理總現 (學 大 政 法) 士博梅 理總前

序

平元兵吾君八大學ト秀才ヲ著シ予ノ序ヲ求ム  
願フニ高等ナル學術技藝ヲ教授スル學校ノ多  
數ナルコト東京市ノ如キハ萬國其比ヲ見ザル  
所ナリ平元君乃諸學校ノ沿革ヲ原子其ノ特質  
ヲ明ニシ以テ筈ヲ貢フ者ノ爲ニ取捨選擇ノ資  
料ヲ供セントス夫レ學海渺茫加フルニ風浪ノ  
險ヲ以テス學者惑フテ扁舟孤帆彼岸ニ達セン

ト欲スル者は二憑テ以テ鍼路ヲ知ランカナ

大正元年十一月

文部次官 福原鏐二郎

自序

國民の齊しく瞻仰措く能はざりし、明治聖帝は終に御登遐遊ばされ給ひぬ、噫誠惶誠懼極る所を識らず、畏くも明治聖帝が不世出なる御英資を以て、永劫不朽なる御盛徳を垂れさせ給ひ、其の御鴻業や炳乎として想望するに餘りあり。

蓋し此の著は、先帝御異例當時より以て國民の悲痛に際せる、諒闇中に於て成りしもの、其の内容たるや、直接明治天皇に關聯これ無きも、先帝崩御の記念として、明治時代思潮の文運が産める、大學並に大學教育なるものが、果して奈何なるものなりや、然して夫等大學出身の秀才が、如何なる飛躍を此の活社會に試みつゝあるやを躍如たらしめ

んとの意に外ならず、明治教育の今日ある、而して幾多寧馨兒が奮闘の跡、茲にそが一斑を叙せるもの仍ち此の著なり。

大正元年十一月

小石川江戸川畔

平 元 昊 宇

は し が き

この著は諸大學の經營振りと、卒業生の比較的頭角を現はせる者を叙したのである、特に八大學と限り帝大を始め法律系の大學を挙げたのは、比較的多く世評にも上るからである女子大學も矢張り其の邊の趣意からで、御茶の水にせんかとも思つたが、他が大學の名あるに依り目白を取つて來たのである。

卒業生の叙述にしても勿論のこと、其の他にも評判者があるが、誤解の月亘は著者の取らざる所であつたから、態々載せなかつたのもある、卓犖不羈の鬼才を抱いても、蓬蒿に蟄伏せるものも古來珍らしくない、韓昌黎の欸才、管亟相の名器を以てしても禍雲の覆ふ所もあつたやうなものだ。

野に遺賢なからしむるは王者の心で、自ら伯樂となつて駿馬を漁るのは

宰相の任だ、讀者のまづ此の書を読むに當つて心に置いて貰ひたいのは即ち此の心である、徒に文章の優劣、文字の曲直に拘泥されては、著者の遺憾の上もないのである。

歴代の文相略傳を掲げたのは、特別の意味があつたのではない、唯だ此の著書の骨子が大學教育と卒業生の消息を掲げたと云ふ意味から、文部大臣は多少の關係があるため、末尾に載せたに過ぎない、學生雄辯家を掲げたのも多少大學に關係があるからである。

著者

目次

第一章 緒論

- 〔一〕 學風の今昔……………一
- 〔二〕 大學教育と社會……………五

第二章 早稻田大學

- 〔一〕 隈伯と早大の發展……………一〇
- 〔二〕 早稻田の秀才……………一五
- 〔三〕 學生雄辯家……………二四

第三章 慶應義塾大學

- 〔一〕 福澤翁と塾の今昔……………三〇
- 〔二〕 慶應の秀才……………三六
- 〔三〕 學生雄辯家……………五二

目次

第四章 明治大學

- 〔一〕 岸本校長と新校舎……………五五
- 〔二〕 學生間の團體……………六〇
- 〔三〕 明治の秀才……………六一
- 〔四〕 學生雄辯家……………六六

第五章 日本大學

- 〔一〕 松岡校長と學校の運命……………七一
- 〔二〕 日本の秀才……………七九
- 〔三〕 學生雄辯家……………八八

第六章 中央大學

- 〔一〕 浮沈の歴史と菊池校長……………九五
- 〔二〕 中央の秀才……………一〇〇

- 〔三〕 學生雄辯家……………一〇九

第七章 法政大學

- 〔一〕 梅博士と佛蘭西法……………一一二
- 〔二〕 異彩ある討論會……………一一六
- 〔三〕 法政の秀才……………一一八
- 〔四〕 學生雄辯家……………一二七

第八章 東京帝國大學

- 〔一〕 帝大起原と貢進生……………一二九
- 〔二〕 各科の盛衰と學生の今昔……………一三三
- 〔三〕 帝大の實驗所……………一四二
- 〔四〕 博士物語……………一四四
- 〔五〕 帝大の秀才……………一五一



〔六〕 學生雄辯家……………一七九

第九章 日本女子大學

〔一〕 女子教育と成瀬仁藏……………一八五

〔二〕 雅致に富める寮舎……………一九五

〔三〕 卒業後と櫻楓會……………一九七

第十章 歴代文相傳……………二〇四

八大學と秀才目次終

八大學と秀才

吳宇 平元兵吾著

第一章 緒論

〔一〕 學風の今昔

ペルリが浦賀に來航してから、徳川三百餘年の長夢は俄然として覺された、南に開國論起り、北に鎖國論膨發して、水火殆ど決する所なく、志士の奔走矢の如く、遂に安政の大獄起り、直弼の掩殺となり忽ちにして復た討幕論起り、三條實美卿以下七卿の長州落ちとなり、斯くて長州の諸黨を討伐すべく赴きし幕軍は連戦利あらずして、茲に徳川幕府十五代は政權をして朝廷に奉還すべく餘議なくされたのである。

緒論 學風の今昔

王政は舊に復せりとは云へ、幕政の餘弊は一掃にして抹殺さるべくもなかつた、又復た忽ちにして、烏羽伏見の戦、戊辰の役、征韓論、佐賀の亂、臺灣征伐、熊本萩の亂と云ふ風に、絶え間なき討争は續行された、斯くて東洋風の當時の志士所謂自稱英雄なる者は下宿屋の二階より奮起して天下を捧るべく、臆面もなく短袴蔽袍道を狭しと國から國へ濶歩して、斬捨御免の化ケの皮とお成りすまし、時に或は法律や、權利、義務など云ふ怪しき口調の下に無辜の良民を騙つて、之を口説き落し空名を名乗つて一方の旗首と成つたなど云ふ滑稽話は、實に一再ではなかつた、所が、民論の據る所漸く定まらんとし、民選議員設立の呼聲高く、板垣伯等の民權自由説など盛に行はるゝに及んでは、如何様、空を仰ぎ手を拱いて天下を執らうとした豪傑書生も、少からず度膽を刳られたのである。

兎にも角にも、下宿屋の二階から荷物を抱へて、一足飛びに大臣官舎

に移つたと云ふ、明治初年の書生と云ふものは、實に大したものであつた、時勢は斯くて、斬り捨て御免の時代思想を脱せなかつたながらも、夙に法學の普及を圖り、權利思想の發達を促して、法治國の基礎を形成するに、多大の貢獻をしたのは、彼等と彼等を産んだ今の私立大學の前身たる法律學校である、それを思ふと現今の私立大學なるものは、寔に心寂しい感がするではないか、早稻田にしても、明治にしても、日本にしても、法政にしても、何れも法律學校時代は、多く天下の志士を出した、單に辯論會より見ても、福澤先生が慶應に三田演説會なるものを始めて起してからと云ふものは、當時恰も板垣伯の自由民權論沸騰當時なので、それがため國會請願の運動が四方に起つた位であるから、當時は所謂それ等の志士の辯論全盛絶叫時代であつた、觀よ馬場辰猪、小野梓等の名聲は奈何に滿天下の青年をして狂せしむるに至つたか。

近頃都下に各大學々生の中堅たる丁未俱樂部なるものがある、早稻田

出身の故圓城寺清や同大學の田淵豊吉、日本の都築鎮樊、帝大の寺田四郎、其の他の膽煎で成立したものだ、時々辯論の外、政治問題を擔いたり、或はルーズベルト氏に詰問書を送つたり、或は南極探検隊に應援したり、最近では支那の革命黨へ激勵電文を打つたりなど時々變つた事を遣るやうだ、まづ現今の辯論界は此所いらが華で、他は皆コンマ以下である。

然るに何事ぞ、現今の私立大學は、唯徒に各自經營者の巧拙に托して、時流に迎合せんとする學科をのみ無暗に殖して法科政治科を衰頽せしめ、殆ど内容を變へて終つて、所謂換骨脱体の有様ではないか、其の形式の整美と利益問題と云ふ點からは、或は多少發展したとは云へる、將た又單に私立大學として視る時は、將來充分發展の餘地もあらう、けれども法律政治を教授した法律學校の後身として之を觀る時は、血渴き肉枯れた活動の殘骸あるのみである、試に之を學科の方面より觀る時は、現今の所謂、商科とか、經濟科とか、文科とか、高等師範科とかを取り除い

たならば、實に思半ばに過ぐるものがあるではないか、而して事茲に至つたと云ふ主なる原因は、執近文部當局の方針や、一般教育界の趨勢が矢鱈に實業教育を獎勵する結果として、學生の多くが實業的方面を志望する傾向を來したからであつて、以前のやうに、法律政治の理窟攻め許りで遣つてをづては、忽ち時運に遠ざかつて、有繋硬骨の私立大學も潰れて終はねばならぬ、と云ふので、漸次變遷して來たのもこれ又無理からぬ理りである、と云はねばならぬ、兎に角今後私立大學の經營振り如何は、吾人の太だ注目すべき問題であると同時に、暗々裡に於ける各大學の競争と、當初よりの各自の特長なども大に注目に値すべきものがある。

## （二）大學教育と社會

近來では、一般社會は、學校殊に大學なるものに就て、從來よりも著しく其の必須を感じて來たやうに思はれる、慶應の如き早稲田の如き、

兎も角も官立大學と併び稱せらるゝものゝ興つた一事に依つて見ても、或は福澤先生、或は大隈伯の努力後援によつて起つたとは云ふものゝ、一般社會が大學教育に就て、インテレストを持つことが、愈々深く且つ廣くあらざる限りは、今日の如き狀況を見るに至ると云ふことは、到底不可能な事である、例へば、ある者が大學經營の衝に當つて、基金を募集するが如き事を擔當するとして見ても、今より十年若くは二十年も以前の事であれば、大學教育を施すため、又は大學經營の爲めに、廣く基金を募集するが如きことは殆ど問題にはならぬのである、何處に如何なる人に相談しても、誰れも相手になる者は皆無であつたらうと思はれる、然るに今日では、米國や其他で見ることが如く、巨萬の大寄附をするやうな人は無いかも知れないが、百萬や二百萬位の寄附ならば、さう難事でもない、詰りそれが基礎となつて、敢て國家官憲の力を借るゝことなくして、私立大學が經營さるゝに至つたと云ふことは、確に現代社會が大學

教育の必要を認めつゝあると云ふ何よりの證據である。

如斯現代社會は、大學教育の必要と云ふことを認めつゝあると云ふのは事實であるが、然し乍ら、現代社會が學問其者の必要を、従前よりも一層深く認むるに至つたかと云ふに、それは蓋し随分な問題ではあるまいかと思ふ、現代社會が、大學教育の必要なのを充分認め乍ら、然も其の學問の價值、需要と云ふことを認めないと云ふのは、甚だ以て理窟に合はん事であるが、吾人は此の點に就て確にさう云ふ傾向があると深く感ずる一人である、即ち現代社會が學問の必要を深く感じてをると云ふならば、所謂學者なるものが、尙一層社會より尊重さるべき筈であらうと思ふ、東西の歴史上の事は去て置いて今日は古へよりツツト學問と云ひ、學校と云ひ比較にならん程盛んになつて來たにも係らず、尙且つ學者を尊重する事の足りないと思ふのは、畢竟するに、學問の必要を感ずることが足りないからではあるまいかと思ふ、勿論今日の學者とても修養の

點に至つては、不足の點もないでもない、けれども社會一般が學者や學問を尊重すれば、自然と學者の修養も出來て來るやうな譯であるから、矢張り一般社會人の考へが土臺となるのである。

然らば、何故に現代社會は、學者よりも學問よりも、大學教育其者を重んずるかと云ふに、教育と云ふ全班をおしなべて、職業教育所であると云ふ考へを持つてをるのが、抑も主なる原因ではあるまいか、即ち學問といふものは甚だ必要のものであるから學校に入れるのだと云ふよりも、學校は職業を得るために必要であるから、學ばせるのだと云ふ考へが多くはあるまいかと思ふ、智識を得、修養を積む爲めの學問でなくして、職業を得るための學問であると云ふことになる、學校が増加しても學問は盛にならない、従つて學者が多く出ないと云ふ勘定になる、慥ふ云ふことになる、と學校經營者は甚だ至難である、被教育者に對して、職業の種も、充分な修養も、立派な學者もと云ふことになる、實に任

重くして道遠しで、逆も遣り切れた話してない學問は職業を得る爲めのものでないと云ふのは云ふ迄もないことで、云は、い學問は職業を得る基礎を作るものに過ぎないと思ふ、それ故如何に立派な職業學校を卒業して來ても、社會では明日より完全に直ぐ使ひ得ると云ふことは殆ど不可能の話である、詰り學校教育と云ふものは、社會の進歩を促すに重大な關係のあるものであるから、固より直接間接には職業と云ふことには關係してをるが、結局はまあよく修養の積んだ、高等の常識を備へた多數の紳士、並に深奥なる學理學說を究めたる少數の學者を作り出すと云ふのが、學校教育殊に大學教育の目的であつて、又世間の望みに適ふ所以下にはあるまいかと思ふ。

要するに、現代社會は従前に比して一大進歩をしたと云ふことは事實である、世間が大學教育の必要を認め、以て之を理解し同情を教ふするに至つたと云ふことは何よりの證據である、併し乍ら前述の通り世間は

學問、學者と云ふことに對しては、教育熱の高くなつてをるにも係らず、多少着眼點の外れてをると云ふのは甚だ遺憾な譯であるから、これは是非一考する價值がある、固より社會一般の趨勢と實業教育を獎勵する文部當局の致す處蓋し大なる原因であらうが、もう少しより多く精神的に、より妙く物質的たらんことを冀望するのである。

## 第二章 早稻田大學

### (一) 隈伯と早大の發展

一度外相として將た又總理大臣として、臺閣に上つた大隈伯は、所謂伯の口舌を借りて言はゞ、失敗の歴史に終つたと云はうか、官界に立つた人としては兎に角餘り華々しきお手並は見えなかつたと世人が云つてをる、殊に伯が一度外相の椅子に上るや、國事最も至難なる條約改正問

題や、外人裁判權問題等に遭遇したので、遂に外相たる伯の力を以てして、何等施設すべきすべからず、全然蹉跌に終つたらしい、これ固より伯一人の罪ではない、我國當時の國勢上己むを得なかつたのである、然るに一方、伊藤や山縣は陛下の御親任斜めならずと云ふので、伯の政敵となつた伊藤や山縣は隆々乎として横威を逞うするに至つたのだ。

それで遂に官界に於ける伯としては、孤立の状態に陥らねばならなくなつた、それかあらぬか伯は、憤然蹶起官界を去るべく當時の所謂改進黨を率ゐるに至つたのである、黨内に於ける伯の勢力は無論異彩を放つた大立物たるを失はなかつたのであらう、だが然し直接の人氣者たる流行役者は矢張り、星亨や河野廣中等の掌中にあることが多かつた、其處で彼れ大隈伯は、實行の人でない言論の人、口の人であると江戸ッ兒式の世評を蒙つた譯である。

兎も角も伯は今以て曾に日本のみならず、世界の人氣役者たるを失は

ないのは事實である、見よ伯が開口一番すれば、何事にも滔々として忌憚なく一通りの批判を試み、世人をして一種のアフィクションを起さしめねば己まぬ、これ彼をして世界の偉人たらしむるの所以であらうか、斯くして伯は夙に伯一流の人物を養成すべく、早稻田に専門學校を創めた、伯を慕つた天下の青年は、四方より争つて早稻田に集つた、而して不規律乍らも忽ちにして一種の學風なるものを作るに至つた、見よ彼の早稻田田圃を、狐狸の巢窟だつた寂寞の野邊は、一轉俄に鶴巻町と變じ、僅に目白臺下を流る、神田蒸水の漲り田圃の二三を残せるに就て見るも思僣ばれるのである、如斯き勢ひだつたので、霞ヶ關一派の眼には、早稻田は所謂伯一流の人物を養成して、遂に何事かあるべしなどの疑問を抱かしむるに至つたのである、所が各専門學校に卒先して早稻田大學の稱號を敢てし、大袈裟にも廣告一點張りて、今日の大發展を敢てしてかると云ふものは、伯の人物も理解され、官界の疑ひも晴れたので、此の頃は御手元金が下る、宮殿下が行啓遊ばされると云ふ破格の榮譽を擔ふに至つた譯である。

私立大學中早稻田程不真目らしく見られる學校はなからう、或は徒黨を組み、或は隊伍を成して、所謂彌次連を組織するの妙を得てをるものも獨り早稻田に見る而已、彼の野球戰又は諸種の歡迎會に望んで見ても事實明かである、聞く所によれば、元來早稻田には學校に籍だけ置いて遊んでをる者が二千餘人もあると云ふことだ、されど如斯不真目らしくして、尙且つ今日の大發展を成し、破格の榮譽を擔つたと云ふのも、亦決して他の私立大學中に見る事の出来ない例である、言ふ迄もなく最初は一の専門學校として、法學教育を以て起つたのであるが、法學校としての早稻田は、其の成績に於て、他の學校に比する時は、甚だ振はぬと云つてよい、政治科を置き、文科を設置するに及んで、漸く其の文科なるものが、世人の注目を惹くに至つた程のものだ、然も其の規模を擴張し

來つて、益々發展しつゝあるのは、寧ろ吾人の最も不可思議とする處である、と云ふのは詰り、其の當初大隈伯が不尠私財を抛つて頻りに誇大的に規模を擴張し、以て世人の注目を惹きたるに基因したので、言はば早稻田の今日あるは、伯の人氣力を巧みに應用し得た一の廣告の力である、所謂早稻田政策なるものは、何の位不可思議の力となつて校の爲めに貢献したか知れぬ、兎もあれ、日本の大立物、世界の人氣役者である伯が早稻田の總裁たること夫れ自身が、非常なる有力の廣告力を敢てした所以で、同時に高田、天野等の輩下が、巨大を好む伯の意を酌んで、日夜規模の擴大に努めた結果、法科文科の外、商科を置き、理工科を設けると云ふやうに、頻りに新設備を施したり、又一方では學校界の流行物たる運動部に力瘤を入れ、時に或は多大の費用を投じて野球團を殿米に派遣するなど、總て行り方が屑々せず、大仰な方法で、世人を驚嘆せしむるので、早稻田と云へば何事に依らず直ちに大學を思浮ばせるので、

學校の實質内容は兎も角、早稻田は偉いと云ふことを首肯させるようになつたのである。

とは云ふものゝ、斯程迄張り極つた早稻田にして、別段鞏固な基本財産とてはなく、收支相償はずして、常に校友の巾着に迫つて、寄附金云々に腐心する所などは、餘り他の大學に異つた所はない、現に二三年前の如きも、約廿萬の金が出来なければ、早稻田は潰れると迄騒いだ時さへあつた、のみならず内部には色々な事情が蟠つてをつて、清國留學生増減に際した時や、今井教授と學生の紛糾事件や、或は又學長の高田と實業の天野と犬猿も管ならざる間柄や、中々事夫れ面倒と云ふ關係なので、儻し夫れ大隈伯なかりせば、今日の盛大を夢想することすら六ヶ敷かつたらう、これを思へば伯もまた偉人である。

## 二 早稻田の秀才



早稲田の卒業生を見渡すと、會社銀行などに發展せる慶應に比べると、何だか逆行してをるやうな氣がする、詰り早稲田は非慶應式だ、換言すれば、慶應は高襟主義、物質主義、拜金主義とでも云ふならば早稲田は、蠻カラ主義、精神主義、天狗主義とでも云ふやうな調子である、故に早稲田出身の多くは、文筆に據りて天下國家を相手にしてをると云つたやうな連中が比較的功を遂げてをる、極言すれば、福澤式と大隈式との生粹の兩半面が表現されてをると云つてよい、であるから早稲田派は一刻も落着いて居られない、手を出さなければ、口が出るとか、脚が走るとか、兎角人氣役に立ちたいと云ふ癖が確にある、まづこれらは極く総合的の話したが此の邊の消息がまた所謂早稲田一派の特長を發揮した所以であらう。

鹽澤昌貞、二十四年英政科出、私立出身の新進にて法學博士の學位を賜はりし人、彼は其學識に於て秀づる所あると云ふよりは、其人物の

敦厚飄逸からして、學生間の風評を博してをると云ふ點にある、彼れには逆も慶應の青木や堀江の様な才氣はない、一字一句苟もしないと云ふ方で、十年一日の如く孜々として倦むことなく、極めて精緻に頭に入れる性だ、だから彼の説き來り説き去る所は夫れイリーの經濟書以外には出ないが、其の精醇なる、恰も戸水の羅馬法の如きものである、現在は母校に政治經濟科長として重鎮の一となつてをる。

田中穂積、二十九年邦政治科出、矢張本校の維持員で法學博士の學位もある、曾ては日々新聞の記者として萬丈の氣焰を吐き、其論する所明透で、文亦氣魄を帯び頗る世目を聳動した、鹽澤の如く仙人的でなく、何處となく貴公子然たる所があつて、英國紳士の風手がある、頭腦は何處までも明晰で鹽澤に比する時は、其の人物學識寧ろ英邁であらう。

永井柳太郎、服部文四郎、伊藤重四郎、何れも新進で母校に教授たる

が、永井は學生間には既に定評あり、蓋し早稻田の人氣教授は永井を措いて他にあるまい。

金子善一、島村龍太郎、中島半次郎、(二十七年文科出)、大山郁夫、桂湖村、(二十九年文科出)、島村金子中島は共に校内教授だが島村は群を抜いてをる、其の小説は温健、人物は眞面目と來てをるから、官私共に受けがよく、文部の文藝委員などにも擧げられてをる。大山は今春米國から歸朝して、今は多分母校の文科に一部の講師として盡してをるやに聞いてをる、中村春雨なども此の時代の者で、今は彼が宗教小説も消息なげである。

松山忠次郎、上島長久、二十七年英政科出、操觚者方面の人物は到る處雲の如くあるが、東京では朝日の松山と報知の上島等が比較的名をなしてをる、聽て逐鹿界裡に見る時代があるであらう。

福田常松、二十五年法科出、安田與四郎、英政科三十四年出、兩人共

やまとの理事者で、前者は逐鹿界裡に外交的妙腕があり、後者は全社の編輯長として財政經濟に長じてをるとのことである。

田川大吉郎、二十三年政治科出、都新聞の社長で市助役である、尾崎市長辭任の際同じく辭表を提出したとあつたが、其聽許を虞れ忽ち中轉して留任の運動をやつたと聞く、宗教家として、操觚社會の主宰者として、清廉でないやうな氣がする、其の位だから大分金も蓄つて、

小石川に大きな邸宅を新築したと云ふことだ。

坪谷善四郎、邦政科二十一年出、府會議員で博文館の重鎮理事、大橋圖書館の監事である別に特長も聞かぬ、可もなし不可もなしの方であらう。

増田義一、邦政科二十六年出、有名なる實業の日本社長、彼の竦腕なる儲け振りは、世の怨みを買ひ褒賞するの人が尠ない、先帝の御不例當時、ある夜二重橋畔の寫眞撮影でマグネシウムの爆發より一大不謹

慎事を演じ、益々世の不評を博した、けれども彼が今日迄、小資本を手にして遂に現地位に進んだのはまづエライと云はねばならぬ、植松考昭、二十九年英政科卒業、「東洋經濟」雜誌の社長、第二の増田たるべく、然も不評なからんを希望する。

網島梁川、二十八年文科出、惜しむべし彼は見神論てふ、宗教道徳で、一種の超越したる信仰論を稱道しつゝ、文筆漸く觀るべきものがあつたが、今は全く幽宴境を異にしてをる、遺著に梁川全集あり、見神論は其の末卷であつたかと思ふ、ある人網島の寓居大久保余丁町を通つて、ある居酒屋に入り、この邊で神様を見た人があると云ふが、吾輩に其の家を教へて呉れと云ふに、網島の舊家を指さし示せば、其の男、草莽の臣高山彦九郎よろしくと云ふ体で、拜跪合掌して去つたと云ふ。後藤宙外、文科二十七年出、朝日に出た人情小説は最う疾うに忘れられようとしてをる、文部の文藝委員會に出品して、等賞を競ふ性の人

でないから、近く傑作も見らるゝであらうと待たれてをる。

押川春浪、行政科三十四年出、「千年後の世界」、「海底軍艦」、「武人島」、「孤島の秘密」など奈何に二八の美少年をして想像を逞しくせしめたであらう、爾來矢張り冒險小説に探検譚に男性的文筆を揮つて、青年弱冠輩の心膽を寒からしめてをる、漁夫此の頃感ずる所ありてか岡玄卿に喰つてかゝり、又は母校の監督者の臙臙なるに肉迫して鋭い刃を向けた、蓋し近來の痛快事だ、彼は曾て野球問題から、朝日子と痛烈なる交戦を試み、大分先方を回しましたが、博文館の水谷、嚴谷等は、朝日の犬翼的復讐を虞れ、和解すべく押川に迫つたが、根が頑鐵の漁夫聞かばこそ、そんなら罷めるア。ヨと云つて、冒險世界を棄てた、暫くたつと例の口調で、堂々と武俠世界なるものを小石川大塚の興文社編輯所から出してをる、吉岡將軍なども彌次り込んで、双壁相向ひ隣家では時々、雷鳴で縮み揚つてをると云ふことだ。

山田英太郎、邦政科十八年出、成田鐵道の監査役、岩倉鐵道學校理事、日清生命保險の取締役。

大濱忠次郎、英語科廿一年出、洋紙織物取引商、横濱商業會議所議員。

宮川鐵次郎、法科十九年出、東京市助役、田川より評判よきこと數等上である。

大谷順作、政治科二十七年出、大阪市助役。

早速整爾、邦政科二十年出、藝備日々新聞社長で代議士である、彼は院内で可なり勢力がある方だが、國へ歸れば勿驚彼の妻君は、毎夜深更まで掌を黒くして、新聞發送に従事して居る、だが父の勝三は因業を以て穢多の如く罵られて居るのだ。

森田勇太郎、邦政科十八年出、静岡民友の社長、代議士で院内では今春憲政本黨の幹事として中々遣り遂げた方だ。

舟橋遂賢、邦政科二十三年出、一寸本大學に在り爾でもないが、彼は

子爵で貴族院議員である。

關和知、西村丹次郎、西村は代議士に出られたが關は惜しい敗戦を見た、彼は元萬朝報に居て、國民黨にはなきてならぬ男だ、彼はマスター、オブ、アーツの西洋學位もあり言論でも筆でも敗北するやうなことはあるまいと思つたのだが惜しい事だ、

江原節、二十三年法科出、辯護士代議士、

櫻井熊太郎、推薦校友、彼はかの日比谷の國民大會で、公園原頭駿馬に乗拂つて、櫻井熊太郎此所に在りとガナツた男だ、惜しむべし先年故人となられて終つた。

内田銀三、山田三郎、何れも本大學より轉じて帝大に入り博士となつた人で、内田は文學博士、山田は法學博士である。

高根義人、法科十九年出、辯護士より法學博士の學位を貰つた。

小河滋次郎、法科十七年出、法學博士で清國監獄事務に顧問であつた

人である。

政尾藤吉、普通科二十二年出、矢張り法學博士で暹羅政府の招聘で法律顧問となつてをる。

朝河貫一、文科廿八年出、朝河は一寸珍らしい人だ、目下エール大學の教授を遣つて居と云ふ事だが、何を教授しつゝ有のか明瞭でない。

### (三) 學生雄辯家

辯論部の由來は賑々しいから茲に述べぬことゝして、直に現在の模様を紹介しよう、早稻田の辯論部は一貫して元氣と云ふことにある、元氣のあるのは確に他に於て見られない點で、元來が此所は論理や論法は餘り構はんで、元氣から出るゼスチアを尊ぶと云ふ風がある、此の邊の消息は、不尠隈伯の感化でつきりと云ふ所であつて、學生界に人氣を取るにも、此の呼吸を覺込んでをるからである、實以てテーブルスピーチ

ヤ交際關係などでは、群を抜いて一花咲かせらるゝことなどは一再ではないのである、であるから理窟攻めの討論懸賞演說會などの時にば偶々奇功を奏することあるも、多くは明治とか、日本中央などにやられて終ふと云ふ譯で、其代り攻撃的椰榆的演說になると、前述の通り、それこそ言々奇節を帯び妙句を吐き、聽衆をして一種の興奮劑に酔はしめねば已まぬ、これ畢竟するに、伯が經營當初の考へよりして、伯一流の風義を酌んだ思想が一貫してをるからの事で、時に或は天下國家を論じて内閣攻撃等に移るや、剴切侮るべからざるものがあつて、立派に虎門側の本場に登つても恥しくないものがある等、早稻田に於て視るのみである近來擬國會を開催するに及んで、元氣以前に倍した感があつた、然るに何事ぞ、曩に擬國會の役員選擇に就て大學部と専門部とかで、非常な内訌が持上り、惜むべし多くの名士を呼んで、尙且つ中止するに至つたとは、其稚氣また愛すべきも、所謂伯一流の早稻田的思想から考へれば、

何だかチト矛盾したるの憾なき能はずであつた。

▽栗山博、東北の人だとか聞く、演説に於て、文章に於て、まだ一異彩を放つたと云ふ評判は耳にしない、それも其の筈事實上手でないこと云ふことだ、けれども彼は非常の精力家であると云ふことは學生界で誰れ一人知らぬ者が無い、彼が足を歩はせ、手を働かせるそれ自身が、彼の口一度出したそれと一致するに於て、始めて吾人は、彼が雄辯を認むるのである、彼れ固より能辯に非ず、達辯に非ず、されど彼が實行、彼が奔走は其の口と共に信せられるので、此の意味に於ける、彼は雄辯家の一人であると感齊しく認むるのである、故に彼れ一度足を飛ばすや、千里を嫌ふとせず、情熱共に沸いて、殆ど寢食を忘るゝこと蓋し一再ならずとか云ふ評判で、兎角の世評ある丁未俱樂部をして、今日尙且つへボ政黨、へボ爲政家をして、偶々薄氣味悪く感せしむる事あるも、彼が一片の力蓋し不尠ざるものがあると云ふことである。

▽稻田直道、彼は卿里鳥取の中學を出てから、高等學校迄進んだのだが窮窟なる官立學校は、彼がお氣に召さなかつた、忽ちフイと逃出して好きな早稲田へと乗込んだのだ、性頗る磊落、邊幅を飾らず、夙に中學時代より滿韓を旅行して歸り郷里鳥取で報告の大演説をしてから、既に其名を擧げたさうである、音量太く聲届き恰も大海の唸るが如き感がある、彼が論酬にして偶々ニヤリと笑ふのは、全く一の御愛嬌である、と善意に解釋して置く、矢張り丁未俱樂部の奔走家であるが、之を栗山に比する時は、彼の如く熱烈ではないが、諄々として説きつけ、如何なる事も遂に之を説破するの妙あるが如きは、學長高田と雖も敬服して已まぬと云ふことである、それで早稲田では、膝詰談判には、彼は何時でも全權公使と云ふ重任を擔ふのださうである。

▽大橋薫、風采の華奢にして、一見女難の相ありと云はるゝ彼が口より、轟然として呼號し、天下國家の政治問題や、時代思想に關する大氣焰

を吐いて、聴者をして一種意外の感想を興ふるのは實に彼れであると云ふことだ、彼未だ新進氣鋭の士であるから、彼が名をして尙深く都下の學生界に擧げるには今一段の努力を要するのは云ふまでもない、希くはそれ小ビツトを以て自ら任すべく努力すべしである。

▽五明忠一郎、彼は信州の山奥から出た、時々彼を中夏の炎々たるに平然として冬帽子を戴けるに會することがある、彼は飄然として來り、飄然として去る男だ、彼は來れば人一倍の奔走もするが、應々待伏せを喰はせられることがあると云ふので、當にならぬ奔走家の綽名があるると云ふことだ、彼れ膽度太だ養はれ居るが如く、壇上に立つて平然たるを見る、而して往々大痛罵をガナルことあるに於てをやである、彼れまた將來有望の士であるは云ふ迄もない。

▽山下健造、辯や能、舌や達、所謂滔々たる懸河の辯と云ふは彼れに於て見る所なるが、然も彼の名天下に現はるゝの遅き、蓋し交際を好ま

ざるに因するのであらう、彼に望む所は、彼は比較的ロヂカルに出來てをるから、言廻はしはそれで充分であるが、更に度膽を据ゑ、以てゼイスタアーを使へば満點である。

▽石田仁太郎、色の何となく淺黒い質朴な風采で見た所沈黙寡言でムツトしてをるが、演壇に立つては中々銳利なる論鋒振りでヒヤリとすることも平氣で云ふ男だ。

▽佐竹勇一郎、風采閑雅のスラリとした粉装は、日本の齋藤徳三に似てをる所がある、國は仙台で元來ズ〜辯の筈だが、彼は巧みにお國訛りを誤魔化して土佐人口調で演説する所は、才氣英發の特長を備へてをるものと云つてよい。

▽大木康孝、栗山の後継者は蓋し彼れに迂るであらう、色の何處までも黒く、デツブリ肥つて、膽が据り、眼は大きく何處かに一癖ありさうだ、栗山の如く癩癩は強くないが、却つて衆望を集むるに適してを

### 第三章 慶應義塾大學

#### 〔一〕 福澤翁と塾の今昔

慶應義塾は、其の名の如く福澤諭吉翁が、安政年間に寺小屋的私塾を開いて、門弟を指育したのが抑もの起りで、今日斯の如き大發展を來したのも一にこれ翁のお蔭であることは云ふまでもない、であるから、慶應義塾の如何なるものであるかを窺がはうとするならば、まづ翁に依りて起り、翁に據りて發展した、其の翁の奈何なる人物であつたかを知悉するの必要がある。

翁は恐らく情の人でなく、理智の人であつたらう、而して又意志も勿論強かつた、翁が成さんとする前には必ず、得るや否やを以てし、種別

の如何を顧慮することがない、よく翁は常に、「人間は損をするものでない、損をする者は莫伽の骨頂である」と云つたさうな、その位であつたから、翁の頭腦の冷靜で然も理性の勝つてをつたことは驚可きもので、倚頼心のある情に脆い男などは大の嫌ひと來てをるので、當時塾などでも、所謂空威張りの豪傑連中などは、一向顧みなかつたと云ふことだ。

如斯く理性に長けてをつた人であるから、神とか佛とか云ふ信仰上の事などは、更に無頓着で、殆ど眼中になかつたらしい、翁が幼時の話したが、郷里に稻荷の一小社があつて、閭邊の信仰が非常なものであつたさうな、それを見て取つた翁はつくづくと考へた、一体稻荷様と云ふものは怎麼ものだらう、中の中まで調べて見たいものだ云ふので、扉を漸次に開いて行くと、最後に小さい牘があつた、それをば忽ち引張り出して、なんだ怎麼ものかと云ひ様、終にはそれに放尿までしたと云ふことだが、翁の神佛に對する一斑がこれを以て視ても想望するに餘りあら



う、果して翁は壯年に及んでも、客觀的には一種の信仰は確にあつたが、翁自身としては、獨立自營大國民てふ彼が著書の如く、自營！、獨立！、決して他人の厄介にならんと云ふ、固い決意と冷やかな理性を以て一團となつてをつた、所謂福澤主義なるものが、世間の人に公表されるやうになつたのは即ちこの主義である、翁は確に偉い人ではあつたが、其偉さ加減が、學校經營者として觀られたから、福澤主義も、塾長たるべく餘りに經濟家であり、餘りに獨尊道德家であつたと、はや今日に至ては一二非難する人も見えるやうになつて來たのである、彼の高山樗牛などは慙う云ふことを云つてをる。

人の傳ふるを聞く、板垣伯は自己の養成したる政黨が今日の如く墮落せるを以て、深く悔恨せりと。吾人は問はむと欲す、福澤氏三十年來養成し來りたる所謂三田學風に對して伯と同一の悔恨無きを得べき乎。政治上の自由主義も、倫理上の功利論も、明治の初年に於ては慥に我

文明によりて新しき福音なりき、唯之を三十三年の今日に施さむとす、柱に膠するの痴に類せずや、三田學者の道德の進化を説くや甚だ力めたり、而かも自家道德主義の三十年來畫一單調なるを如何と、

樗牛の論必ずしも當れりとは云はざるも、翁の功利説より來れる、極端なる個人主義は、何人もよくこれを知る所で、翁が道德を極解して、終に處世の法となせしに至ては、翁の道念の如何に誤まつてをつたかが思知られる、處世の法とは詰り世渡りの術である、道德をして時に倚り機に臨むで、阿附逡巡便佞を事としたならば、これ即ち大道徳家なりと云ひ得るであらうか、是を以て觀る時は、翁の功利説たる自分道德は三文の價値ないものと認めても支差ない、然るに不思議なるかな、翁の主義によりて建てしより爾來五十有餘年、尙宜く今日あるを見るは、如何に時勢の然らしむるものとは云へ、翁を慕ひし者の陸續として來り乞ひ驚く可し、今日の所謂三田學風なるものゝ世に現はれしに至つたのを。

翁逝き、現鎌田榮吉塾長となるや、ハイカラは益々ハイカラに、學風は愈々以て物質的聲價に傾いて來た、吾人は決して之を難じはしない、來るべき反動を期待し得るからである、鎌田の性格は、個人としてよく新渡戸稻造に似てをる、對談の如才なさ、其間何等城壁ある無しである、加ふるに彼は常に力めて体育の旺盛を奨むるの結果として、晩近三田の學風は果してハイカラの反動とも視らるべき、一種實着なる美風を認むに至つたと云ふことである。

それにしても思はるゝは、三田一派の學風の、著しく早稻田派と相違せるものあるを見ることこれである。三田儼し精神的進歩を呪ふならば、早稻田忽ち物質的進歩を呪はん、例せば、彼の數年前より解決を見ざる、野球問題にしても、双方の撰手自ら誠意あるも、四圍悉く相呪ふが如く終に今日の齒痒き醜態あるを如何せむやである、於茲乎吾人は島國的根情の實に腑甲斐なき、學生界の一大恨事なりと叫ばざるを得ないのであ

る。

兎に角慶應は官立大學と比肩せる位であるから、相當基本財産もあるし教授連も咸手が揃つてをる隨而卒業生や子弟なども、多くは金持ちの子であると云ふので、經營者は他の大學より遙に氣樂であると云ふことだ、曩頃十萬内外を費して、壯大なる圖書館を建築し、庫中に一ばいあつたと云ふ、有名な星亨の藏書も悉く此所に寄附されたと云ふことである。

現在學生數を見ると、大學部が約二千五百名、普通部が約八百名、幼稚舎が約四百名、商工學校が約五百名、商業學校が約六百名で合計では大凡四千七八百名に上る、大學部の卒業生を見ると、全部で理財科が約千百名、法律科が約百六十名、政治科が約九十名、文學科が約七十名と云ふのであるから、理財科と文學科などを比較して見ると其差は太しいものがある。

## 二 慶應の秀才

安政より明治六年に至るまでと云ふものは、前述の如く、所謂寺小屋的教育を施してをつたに過ぎないので、這入るにも、出るにも御勝手次第と云つたやうな調子であつた、随つて明治六年までは、卒業生と云ひ、塾の制度と云ひ、丸で滅茶苦茶なので、所謂本塾の卒業生と名乗りを上げられるのは、其の年からの調査に據つたものである、けれども六年以前の者でも、澤山知名の士があつたので、明治廿三年塾員に關する規約を定めた際に、これ等の諸士を特選して加入せしめたのださうである。

伊藤欽亮、十二年卒業、日本新聞社長。

伊藤要藏、十四年卒業、代議士、豊國銀行並に濱尾瓦斯會社取締役、

濱松委託會社長、富士紡績會社監査役。

伊丹春雄、二十三年特選、貴族院議員、男爵。

伊澤道暉、二十五年卒業、本塾教授兼舎監。

井上角五郎、十五年卒業、政友會所屬代議士、蟹甲將軍として名あり。

犬養毅、二十三年特選、國民黨に於て珍重すべき代議士である、曾て

は文相となり、ちうらん疎腕を振はんとせしが、不幸内閣の瓦解と共にたな仆れた、

氏は岡山の人、安政二年四月生る、明治七年東京に出で、湯島の共憤

義塾に入る、幾許もなく學資竭き、藤田茂吉の家に寄食してゐたが、

一日事あつて文を作らしめしに、立どころに仕上げ、又一點の非難す

べき所がない、そこで藤田試みに其意見を聽けば、堂々として卓論風

發の概がある、是に於て藤田は獎めて、あ報知新聞に寄稿せしめ、以て

學資の幾分を補ひ得たと云ふことだ、後慶應を出で、次で報知社に入

つた、十三年に菅了法と東洋經濟雜誌を發行し、十四年統計院權少書

記官に任せられ、後民間に下りて、「報知」、「朝野」の二紙に入り、大隈

伯の改進黨總理を辭して外相となるや、脱黨して大同派に與あした、後

再び復黨して尾崎氏と共に報知に執筆した、二十三年代議士に出てより以て今日に及んでゐる、性や利刃の如く鋭く、聰明にして剛健、一見國士の風格がある、闘士としての彼は真に天下獨歩の士である、彼一度劔を按じて立てば、必ず血を流し骨を刺さなければ止まぬ、近く清國事變に關して内田、外相の外交方針を問ふや、當局爲めに戰慄し、政府爲めに震駭した。

岩村透、三十九年特選、男爵、東京美術學校並に本塾教授。

岩崎久彌、三十九年特選、男爵。

磯邊彌一郎、二十三年特、國民英學會長、中外英字新聞主筆。

磯部保次、二十四年卒業、舊千代田瓦斯常務取締役、代議士。

稻垣未松、四十三年特、本塾教授、文筆に巧にして、議論また剴切見

るべきものがある。

池邊吉太郎、三十八年特、永く東京朝日に主筆たりし人、三山と號す、

彼は官僚係に知人多く、而し又昵懇者の多かつたのも事實である、然るに彼の筆却て非官僚なりしは最も異とすべし、惜むべし彼は天下獨特の顯才を抱き、容貌また何等か一癖ある巨漢の如かりしも、一度病魔の犯す所となり、又再び起つ能はざるの身となつた、彼れ晩年に及んで、朝日社に内紅起り、彼が主張せし文藝欄廢止せられ、遂に隱退の身となつたが、村山氏は特に彼が、操觚界に於て、夙に識見高く、人をして必ずや善化せずんば止まざる崇高なる品格と、多年の功勞とを容れて従前の待遇を與へたのである、彼れにして儻し部下の指導に力め、多くの天才者を容るゝに躊躇しなかつたならば、彼の發展は蓋し意外のものであつたらうと云ふことである。

石渡敏一、二十九年特、貴族院議員、法學博士、日本大學理事、錦雞の間祇候、彼は西園寺前内閣には曾て司法次官をやり、内閣書記官長をもやつた、今や彼は全く没落して仙人的生涯を送つてをる、彼の規

模小にして、器略振はざる、今日日本大學の内情を知れる者ぞ知る、然して日大に於てすら多くの校友は其處分に困憊して兎角の非難ありと傳へらる、前途や知るべきのみである。

石川幹明、十八年卒業、時事新報主筆、彼は學生時代より其穎才を福澤翁に認められたと云ふことだ。

長谷川喬、三十九年特、東京控訴院長、名判官たるや茲に喋々を要しない。

濱尾新、三十八年特、貴族院議員、樞密顧問官、過ぐる八月十五日帝大總長を退いた、沈黙寡言、人に接するを好まない、總長の大役をしてあの位にやつたのは、蓋し彼の右に出ずる者が無いと云ふことである、其の後任者がなくて、文部では困つて濱尾に泣付いたが、先帝の召思とあつて、終に事務取扱なんて云ふものを置くに至つたのだ。

西野惠之助、二十年卒業、西野は人の知る如く帝劇の専務取締役であ

る、して見ると、帝劇の出現が明治演劇史上實に重大事件であると同時に、彼は矢張り明治演劇史上に缺くべからざる人物である彼は山城國相樂郡の人だ、慶應を出るや山陽鐵道に入つた、と云ふと立派だが、其實可驚薄給で倉庫課の隅に居たのだ、其後勤勉と才能とは忽ちにして運轉課長となつた、鐵道國有がなかつたら、固より彼は山陽鐵道と運命を共にすべきであつたが、終にそれより辭して捲土重來を待つた、果せる哉彼は突如として東都の中心に彼の帝劇を建つべく溢澤を口説き落して専務取締となつた譯である、今後の帝劇の成行如何と彼の運命奈何は實に注目し價する。

尾崎行雄、二十三年特、代議士前東京市長、三十一年六月三十日所謂隈板内閣成立の時、入閣して文相となつた、其年十月四日まで在任した、三田を出てから、後工部大學に轉じた、報知より新潟新聞の主筆と成つたは二十二才の時だ、偶外相井上馨の條約改正論起るや、後藤

象次郎と結んで、之に猛烈に反対した、所が時の警視總監三島通庸は内相山縣有朋の命を受け、例の保安條例を楯にとつて、星亨や林有造等外四百餘名と共に、彼は皇城三里外に放逐さるゝことゝなつた、彼は此機を利用して歐米諸國に遊び、二十二年に歸朝し、翌年三重縣から代議士となつて出た、三十年外務省參事官となり、三十一年に文相となつたのだ、曩頃市長を辭して後を坂谷に譲つた。

大谷瑩誠、三十二年特、眞宗大谷派本願寺々務總長。

大給左、四十三年特、伯爵。

太田資美、二十三年特、子爵。

岡部長識、三十三年特、前司法大臣、桂系に屬すと雖も餘り重きをなされず、但だ司法大臣が適任であるからである、であるから彼は多く世評に上らない、上る程また悪事を働かず餘り善事をしたと云ふ事も聞かない、それで尙且つ入閣するのは彼の要領の善い所である。

渡邊千冬、三十九年特、代議士、北海道炭礦汽船株式會社專務取締役。

加藤政之助、二十三年特、代議士。

川村惇、十六年卒業、福寶堂社長。

河村讓三郎、四十三年特、前司法次官。

横田國臣、三十二年特、大審院長。

川村鉄太郎、三十九年特、貴族院議員、伯爵。

横田秀雄、四十三年特、大審院判事、本塾教授。

横田五郎、四十三年特、司法省參事官、本塾教授。

田中館愛橘、四十一年特、理學博士、帝大教授。博士は東北の人、目下飛行機の研究に熱中せりと。

田尻稻次郎、三十八年特、會計検査院長、子爵、將來の國政は主として財政運用の當否に依つて是非を斷すべく、經濟政策は十九世紀の政界に現はれたる最要の難問題である、我國の政治家中、財政料理の識

量あるものに乏しきは憂ふるに堪えない曾て田尻を以て藏相に擬せるものがあつた、大藏次官として其閱歴手腕の世に信頼された者、蓋し彼が如きはなからう、然るに後進の坂谷出でて大臣となれるに拘らず、彼は遯れて會計検査院に入つた、信ずる所行はれざるを知るに由りしが、彼の次官たるや、省内の吏僚皆彼に奉侍して大臣待遇を與へた、威望斯の如くにして何故に韜晦せるや、彼も談理派の人である、學者肌の人である、而して彼は自ら已れの性格を讀み破るの明を持つてを、終に田尻の名は永却大臣名簿に録せらるゝこと無からう、是れ彼の一身の爲めに最も安全である。

谷野格、四十三年特、司法省參事官、本塾教授。

高橋光威、二十二年卒業、原内相の秘書官。

高橋一知、三十二年特、ジャバンタイムス主筆、本塾教授。

竹越與三郎、三十二年特、代議士、太平既に久しきに及んで、人情自

ら輕薄に趨き、後進は義を忘れ、先輩は唯自己の安全のみを圖つて、濫りに後輩を容れない、偶々容るゝことあつても、彼の原敬と馬政局屬官との關係のやうなものでなければ多くは己が羽翼たらしめむが爲めである、此時に當つて一人竹越三又のみは、一日も後輩の誘掖を忘れたことはいない、現に選舉區内に於て散々彼の爲めに妨害したものが、今日彼の周旋によつて、某新聞の有力な地位を占めて居る者もある、彼は恒に清貧に甘むじてをる、然るに世間では彼に疑惑を抱いて、種々なる臆測をするものがあるやうだが、之れは彼を親しく知らないものだ、さもなくば彼が社會上の地位に嫉妬を抱くものだ、今の政治界に清廉彼れの如きは果して幾人あるであらうか。

瀧精一、四十三年特、京都大學並に本塾教授。

瀧澤菊太郎、二十三年特、青山師範學校長、彼は福澤翁の門下になるには面白い話がある、信州の山奥から鋤鋤を棄て、遙るゝ東京

に来て、いきなり福澤の玄關前に立つた、すると書生に相當の紹介を以て來いとお拂ひを喰つた、彼は那麼事では玄關を去らなかつた、會はなければ會つて呉れるまで此所に野宿をしいてをると云ふので、豫の下にドツカと座つた儘三日許り待ち籠りをしてをつた、有擊の翁も之を聞いて、どれ怎麼奴だ面白い會つて見ようと云はれたので、それから門弟になつたと云ふことだ、彼は今や茗溪派の屈指の一人となつてをる、青山の彼と大塚の嘉納と一對となつて、國民教育界の中樞となつてをる。

鍋島桂次郎、三十九年特、統監府書記官兼外務省參事官。  
中牟田倉之助、三十八年特、樞密院顧問官、海軍中將。  
陸奥廣吉、三十八年特、特命大使館參事官、伯爵。  
上田敏、四十三年特、京都帝大文科大學教授。  
野村龍太郎、二十三年特、鐵道院技監。

野口米次郎、二十七年特、英詩人、倫敦アカデミーチーシヨン、サン  
デイ、レゼニウ特別寄書家。

久保田讓、三十五年特、貴族院議員、文部省には關係深い人だ、遂に三十六年には文相の椅子に就いた、文部省廢止論の出た時には、反對派の急先鋒となつたものだが、愈々文相となつてからは、から駄目だと評せられた、爾來文部は彼れが如き無能な者が伴食してをるから榮えないなんて罵言痛論實に外目乍ら寧ろ不憫に感じた、頭腦があるのか無いのか知らないが、やはり貴族院議員位の所が駄々してをるには適切かも知れぬとのことだ。

久留島通簡、十二年卒業、貴族院議員、子爵。  
九鬼隆一、二十三年特、樞密顧問官、古社寺保存會々頭、男爵。  
黒田長成、三十九年特、上院副議長。  
柳原義光、四十年特、上院議員、伯爵。



山本達雄、二十三年特、現大藏大臣、彼は大分縣臼杵の生れで、慶應を出てから三菱の商業學校に學んだ、明治十六年頃三菱に就職して、それから日本郵船の支配人などもやつた、廿二年に日本銀行の營業課長に轉じてから、そろそろ頭角を現はして來た、岩崎男が去ると後を襲ふて總裁の椅子に座つた、それから勸業銀行の總裁に轉じていきなり入閣したのだ、其間彼の平生の歴史は随分葛藤が多い、腰辨で朝鮮邊りを放浪した事もあるし嘗ては岡山の商業會議所で、箕浦勝人の下で簿記の教員などをした事もある、彼は游泳術に巧みなのと、進退を所決するに機敏なのが彼の唯一の武器で、彼をして今日あらしめたのは全く此の力である、彼は故伊藤公の直參者や、延いては國民黨の犬養木堂等迄昵懇であるから、自分には信ずる所深く成さんとする成算また大にあるであらう、けれども膨脹に伴ふ豫算の請求に就ては、吾人私かに不安を感ずるのである。

安場末喜、二十三年特、貴族院議員。

松平頼和、三十八年特、式部官、子爵。

松平康莊、三十九年特、上院議員、侯爵。

松波仁一郎、四十三年特、帝大及本塾教授、衆議院に打つて出づべく

野心満々たりと云ふことだ果して信か、

牧野忠篤、二十六年卒業、上院議員、子爵。

牧野菊之助、四十三年特、大審院判事、本塾教授。

福澤一太郎、十五年卒業、時事新報社長。

小松謙次郎、三十八年特、遞信次官。

小松原英太郎、三十三年特、前文相、彼は岡山の人、本塾を出で新聞

記者たること十數年、外務、内務、太政、府縣に官吏たるまた二十餘年、四十一年七月第二次桂内閣成立の時、入閣して文相となつた、して四十四年八月まで在職した、彼が在職中の重なる出來事は、國語假

名遣を復舊せしこと國庫より教育費百萬圓を支出せしこと、學制案を改革せしこと、南北正閏問題の起りしこと、文藝委員會通俗教育會を設置せしこと、優良いりやう小學校を選奨せしことである。

五藤兵司、二十三年特、海軍主計大監。

後藤牧太、二十九年特、高等師範學校教授。

有馬良橘、三十八年特、海軍少將。

蘆野敬三郎、三十九年特、海軍大學教授。

齋藤恒太郎、十三年卒業、外務省翻譯官。

齋藤十一郎、四十三年特、司法省民事局長。

鮫島武之助、二十三年特、上院議員、日本銀行監事。

箕浦勝人、七年卒業、代議士、報知新聞社長、彼は河野、島田、武富

等と共に國民黨の誇りとする人物である、河野盤州は未だ驕氣と穉氣とを有する點に於て少しく望みあるも、彼れ及び島田に至つては當年

の面影なく、今や官僚派の臭味あるものとして人の指す所となつて終つた。

篠田利英、四十一年特、女子高等師範學校教授。

日高壯之助、三十八年特、豫備海軍大將。

廣澤金次郎、三十四年特、上院議員、伯爵。

一柳末徳、三十八年特、上院議員、子爵。

土方寧、三十二年特、帝大法科大學長。

森田庄兵衛、二十三年特、上院議員、伊都銀行頭取、和歌山縣農工銀行取締役、四十三銀行監査役。

以上舉げ來たる所、大學制度となつて卒業した名士としては寔に少いが、それ以前の特選者が非常に多い、して随分相當な傑物も出てをるやうである

### 〔三〕 學生雄辯家

演説の開山はこの慶應だと聞いて居る、單に學校演説の開祖である許りでなく、廣く日本に於ける演説なるもの、元祖であると云ふことだ。坂を登り詰めて、高台の所謂三田校庭に入り、裏門の方へ抜けようとする、敷石の路の左側に、古い西洋館がある、是ぞ後世まで日本辯論界史上に、誇るべき好記念として有名なる演説館である、明治八年富田鉄之助の米國公使たるや、彼の國の演説館の設計圖を作つたものを、福澤翁に示した、それをば直に諒とし翁は二千餘圓を投じて建てたのださうだ。

三田の演説風を評する者は曰く、一般にゼントルマンライクであると、福澤翁以來獨立自尊の學風、洵にさもあるべしだ、けれども皮肉無双な犬養や、毒舌無類の蟹甲將軍も、慶應育ちとは實に一奇の感なき能はず

である。

▽金子伴二郎、小兵な男だ、けれども何となくシツカリしてをるやうに見える、聞けば彼は中々の剛健家で、寒中と雖も足袋などは穿かないで、テンツルテンの袴を穿いて、平氣で大道を活歩する所は、明治初年の所謂書生氣質其儘だと云ふことだ、經濟論や殖民論は彼の得意とする所で、造詣驚くべきものがあると云ふことである。

▽津野田貞三、前の金子の如く、慶應には珍らしい蠻氣を帯びた學生だ、第一顔は髯武者、骨格逞しく、色は黒いと來てをるから壇上の人としてしまづ一癖あるを思はせるのだ、加ふるに彼の獨眼龍で睨まれたらヒヤリとする、彼の演説は態度應揚で、舌端壯烈蠻氣を帯び、頗る痛快にやる、此く蠻氣ある彼にして、情厚く涙脆く友人を思ふの情切なるものがあると云ふことだ。

▽杉山巖、彼は露領樺太に生れた、日本語を解し始めたのは、ヤット中

學に入る頃ださうだ、それで雄辯家とは偉いものだ、如斯彼は中年にして日本語を學び尙且つ雄辯家たるの素質を有すると云ふのは、一にこれ彼の才氣の然らしむる所だ、彼の文藝に堪能なるもこれが爲めであらう。

▽石川誠、石川は神経質な男だと或人が云へば、いや彼の顔付の然らしむるのだと云ふ、何れにもせよ彼を評する者は威一様に温厚な青年だと云つてをる、彼は好んで思想上の學問を探究してをる、隨而彼が演説も政黨政治には餘り口を出さないやうだ。

▽甲斐惟一、云ふまでもなく彼が塾中大立物たるは威齋しく認むる所だ、辯舌また天晴れで辯論部の元老たるを失はない、彼が全盛とも見らるべきは、中央新聞主催の學生聯合演説會の折だ、其奮闘振りのアツ晴れさは有名なものだ。

右の外、大島重吉、角谷輔清、武藤榮、寺尾誠など二世があるから、

元老が去つても心配はない、これらの面々懸て第一世たるは云ふまでもない。

擬國會は慶應にもある、而も随分古いので、早稻田などはまだ學校の出来ない明治十三年三月に、犬養木堂、伊藤欽亮、鎌田榮吉の諸氏によつて開かれた、詰り擬國會でも慶應が元祖だ、明治十三年と云へば本物の國會開設のツット前であると云ふのは面白いではないか。

## 第四章 明治大學

### 〔一〕岸本校長と新校舎

明治大學は近來大發展をした、約廿萬圓を費して移轉の上大建築をした、序に明治中學も建て、柏木に廣いグラウンドを抱へて、運動部にまで力瘤を入れて來た、内容の充實奈何は兎も角、今日の膨大を産んだの

は、一にこれ明治的商略に歸する。

この明治的商略は、何の位この學校にとりて鎮護神となつたかは知れぬ、校長幹事の番頭手代的なる所學生や卒業生に顧客の扱をなす所などは、明治大學獨特の遣り口で、而も同校創立の當時から、此の主義が一貫されて來て、終に今日の膨大を産むに至つたのだから、此の商賣的政策は蓋し明治の動かすべからざる生命である、同校の創立は、明治十四年一月で、明治法律學校の名を以て創設されたのである、一体我國の法制及法律學なるものは、殆ど支那法系の一種に囿してをて、組織あり系統ある所の専門學としての存在は未だ見るに至らなかつたのである、故純然たる法學は、明治中興以後の事である、明治の元年に太政官内に刑事事務科を置いたのが司法行政の嚆矢で、其後種々と變つて、二年には刑部省を置き、四年には刑部省彈正臺を廢して、司法省を設置したのである。

當時法學に關する東京官私立の各學校創立年月を表示すると、司法省明法寮法學校が五年七月、東京大學法學部が十年四月、司法省出仕生徒が十年七月專修學校が十三年九月、明治法律學校が十四年一月東京專門學校が十五年十月、東京法學校が十六年獨逸協會學校法律科が十七年十月、英吉利法律學校が十八年七月、和佛法律學校が二十二年五月、東京法學院が二十二年十月、慶應義塾法學部が二十三年一月、日本法律學校が二十三年九月と云ふ順序で、この中明治法寮學校は後屢々名稱及所管の變更があつて、十八年九月東京大學部に合併せられ、東京大學は今の帝大となり、司法出仕生徒は廢止され獨逸協會と專修學校は法律科を廢し、東京法學校和佛と合併して今の中央大學となつた。今日の所では法律學校としての創立の順序から云へば、明治は帝大の次ぎで、私立のみで云つたら明治が第一と云ふ譯である。

創立後間もなく校長となつたのは、岸本辰雄で今春電車の中で卒倒し

明治大學 岸本校長と新校舎



たのが原因で、可惜し遂に不歸の客となつたが、彼は同校の爲めに何の位心血を灌いだか知れぬ、現在と比較したなら、創立當時の惘然たる事太しきもので、實際緊要な設備の費用から講師の報酬まで碌々支拂ひが出来なかつた、そこで岸本校長は一策を案じ出して、三ヶ年月謝前納者に對しては、割引せしむるの特典を與へて、一時の完納を奨めそれらを集つた金で種々の費用に充てた、これが抑も彼が商略的手段を施した第一着歩であつて、爾來彼は其手段に依つて、徹頭徹尾學生の誘引に手を盡したのだ、ある時は學生の歡心を買ふが爲めに、優等生を一等より廿等まで拵へて、悉く賞品を與へたと云ふ古來稀れなる授賞法を敢てした、或は又入學の際生徒より取る束修と云ふものがあつて、各大學規約の下に行つてをるのだが、岸本はこれさへ破つて無束修でドン／＼生徒を入れたりした、然も其陋劣なる商賣的手段は意外にも効を奏して、學生は日一日と増加する、就中清國留學生は根が商賣根情より忽ちにして彼等

の歡迎する所となり、遂に岸本は錦町に分校を置き經緯學堂なるものを建立し、剩へ寄宿舎まで設けてやつた、當時の盛んなる早稻田に次ぐと稱せられた、然れど學生の修養教授の方面に何等施す所なく放任して置いたので遂に學生の成績上に忽ち一大缺陷が起つて日本とか法政中央あたり、抜かれて來たので、學生は漸次減退を見るに至り、容易に挽回すべからざる窮境に陥つた。

如斯き有様となつても岸本は尙且つ商略的政策を止めなかつた、此の點に於て吾人は到底常人に認むべからざる點あるを知つた、彼は遂に其政策を校友に施したのである、まづ地方の校友が上京すると云ふことを聞くと、幹事が新橋や上野に待つて居て懇懃以て手を引き荷物を抱へて學校に導く、學校に導かれたら最後御馳走政略でやられるから、寄附云々と云はれても校友は皆相應の寄附をするに至るのだと云ふことだ、かくして終に彼は巨大の寄附金を得るに至つたのだ、云はゞ彼は彼が目的

を遺憾なく達せられるのだ、見よ、近來は、私立大學中、メキ、メキ、と頭を擡げ、て來て、駿河臺上、嚴然と新築校舍を構へてをるではないか、不幸遂に岸本は逝き、校舍また火を失して記念大講堂と中學の過半が焼失するに至つたが、其焼けつゝある最中に再築の請負契約を取結んだと云ふ勢ひはまた大したものではないか、岸本校長、長逝後學監であつた木下友三郎が校長の椅子に据つた、木下は今の所可もなし不可もなしと云ふ所ださうだから、もう今日の様に大体固りかゝつた明大としては、大した手腕も要るまい、岸本の様に餘りに棘腕を振ふと一時は發展するが、怎うかするとガタリと瓦解するなんて云ふことも往々あるから、もう握つたものだから、可成緩めない工夫をするのが肝腎ではあるまいか。

### (二) 學生間の団体

學友會、學生全体が風紀や節制を戒むるべく明治三十九年三月に出來た

もので、學生の品性を修めたり、健康を増進せしむるなど、別して他校に變つたこともない、會は体育、學藝、庶務の三部から成つてをる。

イ、体育部、庭球、柔道、劍道、端艇、野球となつてをつて庭球は袋町のテニスコートであり、端艇は隅田の上流にある、近頃スライジングボートも出來たやうだ、柔道劍道は校内西側に武堂と云ふ道場が出來てをつて廣さが百坪許りある可なり廣い場所だ、野球は前述の通り柏木にグラウンドがあるが、未だ新らしいので早慶に比すべくもない。

ロ、學藝部、各學生專修の學藝は論なく、一般の學藝に亘つても大會を開いたり、毎月一回雜誌學叢を發刊して文筆を練つたりする、この部の主なる団体は音樂會と雄辯會である、雄辯會の模様は後節に委しく述べる。

### (三) 明治の秀才

明治の卒業生は咸齊しく、法律系の人なので、辯護士とか判檢事など

に縁深く、彼の早稻田や慶應の如く各方面には亘つて居ない、これ又學校の性質上已を得ざることで、別に早、慶が名譽でもなければ明治の名譽でもない、但だ法律學校として、可なり古い歴史を有し乍ら、何故か人材が尠ない氣がする、江間俊一や齋藤辯護士位が關の山で、他は皆ドン栗の背比べである、一体窮窟過ぎる學校よりは、顧客的に扱つて大事にして呉れる學校が良いと云ふ連中が、果して薄志弱行の徒に視るべきものだと云ふ議論が、多少眞理ありとすれば、或はそれが影響して居はすまいかと疑ふのである。

江間俊一、二十二年七月卒業、辯護士で代議士、深川電燈會社取締役、東京市會議長、彼れの卒業當時は秀才の聞え高く、遂に伊藤公にまで知られて、行く／＼は入閣するだらうなどと噂されたことがあつたが、公の没後は更に呼聲が低くなつた、飛ぶ鳥も落すと云ふ道長を氣取つた森久保の全盛時代は過ぎて、天下は聊か江間に推移した感がある、

矢張り東京市政の料理は此の二人が遣るので、溝淵とか、角田、青木、山口、中鉢の連中はまづ部下の陣笠たるに過ぎぬ、電車市有問題や、百萬燈計畫問題、又は市區改正の名の下に種々の好機會を拵へて、金を儲ける奸策を廻らすのは、咸此の江間一派が遣るのだと聞いてをる、一体江間の遣方は猛獸的で、蝟集の奈何は固より顧みる所ではない、それでまた彼の事は反對が多いと定つてをる、それ故彼は賛成とか反對とかを眼中に置かないのだ、其辯毀譽褒貶には頗る神經過敏で、新聞記者などには、怎うも新聞では俺は一度も譽められたことはない何時でも悪口ばかりだと云つてをり乍ら、自分より以上の金満家などか、名望家などには見苦しい程頭を低くするとの事だ、こは強ち江間許りではなく、森久保なども第一にさうだ、兎もあれ彼は伊藤公に早く逝かれたのは、最も彼の不幸とする所で、將來何れかに系統を需めて、飛躍を試みようとしてをるか知らぬが、彼は單獨で進むべく最も策



の得たる所であらうと云ふ人もある。

齋藤孝治、十五年十月卒業、辯護士で府會議員、以前は府會議長の椅子に据つて、市會と並んで府會も盛に振つたものださうだ、今とても當年の意氣と面影はたつぷあるやうだが、大分此の頃は年増しに穩健な人と變つて來てをる、明大の建築一件などには、君の努力が與つて大なるものださうだ、餘り温順過ぎると下々の民衆か認めて呉れても、朋輩や上の方で馬鹿にして視て呉れぬし世の中は儘にならぬ、思切つて當年の意氣を吐いたらば怎うだらうか。

今村恭太郎、二十三年七月卒業、本大學講師、東京控訴院部長、名判事として名聲噴々たる云ふまでもない。

平岡萬次郎、十六年三月卒業、辯護士では可なり振つてをる。

宿利英治、二十六年六月卒業、農商務省事務官、特許局庶務課長、健實素朴舊固氣の人だと聞えてをる、省内でも随分信用が厚いと云ふこ

とだ、

入江爲守、二十三年七月卒業、子爵、上院議員、今春は豫算委員などをした所から見ると、中々の勢力家らしい。

寺田榮、十五年十月卒業、大藏省臨時建築部、衆議院書記官。

依田銈次郎、十五年十月卒業、東京府事務官、可もなし不可もなしで、別に大した事も出來まいが、又其變り大した間違へもでかさないたらうと思はれる。

井本常治、十九年五月卒業、辯護士、斯界では可なりの方

安藤保太郎、十九年五月卒業、市電氣局部長、隆文館監査役。

岩崎惣十郎、十六年三月卒業、辯護士、仙臺に居る、種々の會社にも關係してをる。

加藤重三郎、十七年四月卒業、辯護士、名古屋に居る。

入江武一郎、二十一年六月卒業、衆議院議員、辯護士。

土居通博、十八年四月卒業、名古屋控訴院部長判事。

石田仁太郎、二十五年六月卒業、朽木の人辯護士で代議士で院内では

中々振つてをる。

關田嘉七郎、十八年十二月卒業、代議士。

坪田十郎、神戸市選出代議士。

野添宗三、辯護士で代議士、以下略す。

#### 〔四〕學生雄辯家

岸本校長の學生吸集策や校友に頼りて寄附金を巻上げる事に非凡の才ある所謂辣腕家なるは前述の通りであるが、斯る校長を戴いてをつた明大の辯論部は、更に名にしほふ、辣腕家を以て都下二百萬市民をして喫驚せしめつゝある江間俊一を以て部長とせる所は、鬼に金棒たるの感なき能はずだ、彼れ果して此の辯論部に部長として忠實なるや否やを知ら

ずと雖も、麾下の面々にして江間に學ぶ所多からんか、青年の英氣をし都益を潑瀾たらしめ、都下雄辯界に一頭地を抜くべきこと些の難事でないからう、近來新校舎の設立と同時に辯論界益々優勢の氣配を呈しきたり下にて學生の注目する所となつて來た、吾人の視る所では、從來明治の辯論振りは一高式に流暢にして美辭多く形式に據るの癖ある如き憾ありて、所謂能辯達辯を尙ぶの風ある如く感せられる、加ふるに元氣と音量とに注意し、思切つて聽者を一呑みに睥睨し、蠻聲に過ぐるも可なり、以てデエスチュアーを自由に慣用し得ればそれで充分である、要は但だ元氣の少しく劣れるに在りと云はうか。

明大の辯論部は四十一年九月に小倉、羽生、西野等の諸士によりて起された、才子肌の根岸とか、正直一方の牧内とか、或は美辭流暢の舌に富んだ鈴木や、何れ雄辯家は理窟家が、わけても理窟家の合屋などによりて、内閣は引渡され、鈴木のみは今まで再度の入閣を得て左記の諸士

に至つてをる。

室伏高信、彼は見る所紳士らしくもあり、學生らしくもあり常に平民的思想を持つてをつて、華族とか士族とか云ふやうな人間に階段を拵へて置くのは無意味で堪らぬ、新平民とは一体何だ、俺は今に穢多村から妻君を迎へるなど云つてをる大の變り者だ、であるから、彼の演題などを見ると、浴場全廢論、華族絶滅論、などと云ふことを持ちかける、言句奇抜で、聴衆中にも其お蔭で腹が痛くなる者さへある、それが彼は天下一品の山水朋媚の箱根に生れた人間だ、「學生論」とか「立憲政治」とか云ふ著書さへあると云ふことだ。

鈴木正吾、愛知の佛壇屋の件に能くも似合はしからぬ彼の様な萬能の兒が出来たものだとは彼の昵懇者の話だ、演説は勿論滔々として水の流るゝが如く、鏘々として鐘の如き音調で、意外の世界統一論などを擔ぎ立てる、其他ポルトでも野球でも、ランニングでも、決して人後

に落ちないと云ふ素的滅法界の男だ、それでまた、學校の方では特待生と來てをるし、心は無邪氣で子供らしく洵に虚も穩しもない、彼は全く人間中の櫻花だと云ふことだ。

徳野眞、瘦軀鶴の如きも、志は宇内を呑むの概がある、彼れ曾て往々奔馬馳驅の身だと聞いた、日露の風雲急なるを告ぐるや、朝鮮八道を飛び歩き、遂に鎮南浦に至り、一時新聞界の人となり、縦横の健筆よく極東の推移問題を論じたが、忽ち心機一轉、斷然筆を棄て、東都に上つた、彼が明大商科に入學したのは、蓋し其意に外ならないのである、本年開催の擬國會には總理大臣の椅子を占め施政方針の大演説をやらかしたが、中途端なくも黨派に中々の反對黨現はれ、大分困つたやうだつたが、最後に甘く切抜けた所は、今の西園寺の第一次内閣の最後よりか遙に立派だと思つた。

大原常造、女郎屋廢止の反對論者で肥大な体軀で中々の皮肉論をやる

が、彼當人は吉原に遊びに行きたいかいなんて彌次られる所は矢張り舌界の花形役者に耻じない所だ、彼に警告すべきは、論旨今一段深く強く一貫されんことだ、押出しの充分なのは先づ安心してもいい。

松崎富之助、野州は足利町に白馬將軍様と云ふがあつたさうな、壯年の頃血氣の勇を振ひ、堂々として白馬に跨りて市中を飛歩き、毎夕吉原に豪遊をさめ込み、牛飲馬食して徳利は船の帆柱を並べた如く、室の隅より隅に林立させ、大盡風を吹かせて遂に累代の資産をして、瞬くの間に蕩盡し得た將軍は、飄然として悔悟し、唾手一番忽ちにしてまた數萬の巨財を作つたと云ふことだ、松崎富之助は將軍の倅である、彼また乃父に酷似し、豪放磊落時に或は下駄の鼻緒切るゝが如きも粗繩を以て結びよく市中を濶歩するに躊躇しないので世界併呑論などを好んで豪語する。

其他筒井、中津川、尾形、岸本等の諸辯士敗す劣らず鎗を削つてをる。

## 第五章 日本大學

### 〔一〕松岡學長と學校の運命

日本の創立は明治二十三年九月で、女子大學を除き各大學中最も後進の學校である、廿三年と云へば、當時恰も憲法の發布や國會開設のあつた翌年で教育に關する御勅語の下賜された時であるから、やつと法律と云ふものは如何なるものであるか位が、薄々國民の頭腦に這入り込んで來た當座であつた、如斯日本の生れたのは、國家の大勢が然らしめたので、蓋し偶然ではなかつた、それに日本の抑も出來たと云ふのは、當時の法律は多くは、佛蘭西法とか英吉利法とか云ふ外國法を根本に置いて教授したもので、我國の法律を怎うの怎うのと云ふ學校は未だなかつたのである、其日本の法律なるものを教へると云ふ目的の下に出來たのは

即ち此の學校である、前司法大臣の岡部子爵故山田顯義公などは、これに就て最も關係の深い人だ、其の意を酌んで松岡が學長となつた、所が間もなく創立後四年目になると、意外なる窮境に陥つて、一時は全然學校を閉鎖しようとするまで決議するに至つた、折角建てた學校を其目的を達せずして閉鎖するとは、何たる不面目であるか云ふので、松岡學長は非常に憤慨した、かくて松岡は硬派校友や其他の有志に謀つて、漸くにして維持することが出来たのだ。

其後長島や平沼等が幹事たるに及び漸次幸運を呈し來り、戸水寛人入るに及んで益々面目を一變して來た、それも其のはづ、戸水は云はずと知れた案中劃策の膨大を好み、其癖後はだらしない遣り放したが、兎も角太ッ腹の男だから、青年學生には歓迎される、事務員には今までの區々、幹事よりは萬事務め良いと云ので、園園が威これに應じたからである、揉て加へて其下には今の警視廳官房主事たる湯地幸平とか野中彦三郎な

んで云ふ、豪の者が麾下に居たので、實に思切つたことを遣つた、校舎前の道路側の家屋をば買占めて取拂ひ、以て新築校舎を建てるべき餘地を拵へたり、或は終に運動部の方まで發展させて三艘の新造ボートを墨田の上流に浮べたりした、所が戸水が金澤から代議士に打つて出ると云ふ事になつてから、頓と學校經營には知らぬ顔の半兵衛と定め込み、剩へ運動費にまで學校の資本金を費つたと迄噂されるに至つて、彼は遂に自ら責を引くべく理事を辭した、當時は兎に角五六千圓の借金が出来たと云ふ位であつた、けれども吾輩に曰はせれば、今では石波が其借金を整理したから、其點だけでも偉いと人が云つてをるさうだが、これは吾輩全然反對である、石波が就任後戸水時代の借金を整理したのは事實か知らぬが、人の借金の尻拭ひした丈で、他に何等の計畫を立てず、剩へ大切の卵なる學生の減退は何事である、學生が減じて借金が無くなつたからとて、何處に偉い所がある、これ即ち益々規模を縮小にし、抱負を

滅殺し、元氣を鎖沈するの所以ではないか、借金したくも石渡においそ  
れと出来得ぬのは最初より明かである、全体借金は容易に成し得べきも  
のに非ず、況してや東都の真中に於て借金までして、兎に角あれだけ擴  
張した戸水は、慥に石渡より數等上の遣り手であつたに相違ないと思ふ  
借金は懸て努力の結果如何にもなし得べし、心すべきは但だ學校の發展  
策これである、學校の發展は、其發展せしむべき一の理由がある、開は  
即ち學校に直接關係ある理事者たるもの學校と運命を共にすべき覺悟そ  
れである、視よ、慶應にしても、明治にしても、早稻田にしても、若く  
は彼の目白の女子大學にしても、學校の發展策には、理事者があらゆる  
手段を盡し、あらゆる方法を講じて血を灌き膏を搾りて爲した其努力の  
結果である。

日本の校舎建築云々を稱へてより茲に旬年ならず、然も未だ以て着  
手すべく、何等の準備のないのは、蓋し此種の理事者に乏しいからであ

る、隨而發展すべき何等の經營方法を知らぬからである、將たまだ斯く  
力めんとする者の未だ曾て一人だも出でざる故を以てある、石渡理事  
の一度學校に出勤するや、事務員の執務振り如何を見、また他に何等懸  
念するなし、然して僅し一事務員にして、執務上に些の缺點あるを認め  
んか、自ら急遽走つて窓口に至り、彼れ此れ容喙詮議して以て得たり賢  
しとするのみである、恁は是れ誰しも日本の内部を知れる者の咸齊しく  
知る處で、さればにや校友中には彼を嫌忌するの餘り數萬の富を抱き乍  
ら然も一文の寄附すら尙能く肯せずと云ふ者も現にあるさうである。

されど校友と云ふ校友は悉く學校新築云々には熱してはをるけれども  
寄附金の集まらざるは如何せんやで、口では云つてもイザ金となれば中  
々出さぬ、其のまだ出さぬ重大なる理由が有のだ、何時建設するやら  
到底豫想し得ざる所へ出金すべき真迦がないと云ふのが一般らしい、こ  
れ即ち石渡の信用なき第一の理由である、してまた校友の意志を收合す

る方法を知悉せぬ所から成銘々勝手氣儘の事を云つてをるのである、加  
之惜むべし、十年來事務長として名聲高く、其股肱と頼むべき筈の野中  
幹事を逐ひ出して終つたので、益々内部は衰微して來た、野中は終に已  
れの事情と學校の運命を觀破して自ら辭したのではあるが、石渡は野中  
の辭退を喜んで容れたと云ふのも太だ奇とすべきではあるまいか、石渡  
は前西園寺内閣には司法次官や、内閣幹長まで遣つた男だと聞くが、今  
度入閣せざりし理由も、かくやと思はれる點もある。

それで、松岡學長も此頃は昔氣質の頑固親爺ではあるが、ソロ／＼石  
渡には呆れて來て、校友の一部の人には石渡のやうに考へが小イボクでも  
困るがなあ、なんて慨嘆する時もあるさうな、元來松岡の考へと、學  
校の歴史上進もある種の學校の如く商賣的政略を施すと云ふことは、不  
可能な事で、學生の多くが、ある事情の下に、晝間勉強し能はぬとか、  
師範部の如き多數は學校教師が出來てをるを見ると夜間教授なる此學校

として、怎うしても素材を尊ぶべきは然るべき策ではあるが、時勢の境  
遇上矢張り一通りは、どうせ建てるならば萬事見苦しくない方が良いと  
は學長松岡も望むでをるようである、松岡老いたりと雖も中々時勢を視  
ること鋭く、随分學生には理窟を云ふが、それ丈また世話もすると云ふ  
ことだ、それで又學校にも熱心で、會合の折々には葉山の別莊に居ても  
態々やつて來るとの事である。

學生の多くは前述の通り眞に勉強すべき者が多いので各科各科共成績  
よく、また教師や、時間割の配當、教科目の撰擇などはすつと以前から  
頗る巧妙に出來て居て、他に殆ど類がないと云ふことだ、だから一時は  
學生の數も非常に多く三千以上にもなつて、其盛大さ早稻田に亞々とま  
で曰はれたのだ、然るに何事ぞ今日の狀態は非常なる衰微を來たして二  
千に足りないといふではないが、硬骨學友、硬骨校友の此の際大に奮起  
すべき秋である早稲田でも、明治でも、將た中央でも建築などの噂でも

あると、早や校庭には山の如く材木が積まれた時だ、其所が日本は下手だ、否な石渡は腕がない、ある程度まで金が出来たら、ドン／＼材木を買込んで着々始めたらいゝではないか、爾うすれば有繋の校友も黙して居はすまい、忽ち彼れ此れ云ふ中に立派な校舎が出来て終ふのは、火を見るよりも明かである。

此所に書後れたのは、餘り人の注目を惹かざる、現司法次官の平沼一一郎、彼は君子然として温健なる所より、多くの校友に忘れられんとせられるが、彼が日本に關係の深い事は非常なもので、また熱心の度も意外にある、或は石渡より以上だと云つてをる、事實爾であらうと思はれる、彼身多忙の故を以て學校には偶にしか顔は出さないが、寄附金募集に就ては人の知らぬ暗々裡に活動して呉れると云ふことである、して見ると彼は決して名目上のみの理事でない事は明かである。

以上記する所を以て、吾人の視る所によれば、儘し日本にして、此の

時代の風潮を忘れ、徒に素朴陋舊を守り所謂單に彼の英國のイトトンの人物學校を真似て、外形の古きは以て内實の絢爛を意味するものにして、保守退嬰を尊ぶもの一にこれ生命なりてふ駄洒落れを云ふを得意とし、此の儘閑却放任に委するが如き事あらば逆度し能はざる窮境に陥るや必せりである、吾人は此意味に於て、速かに彼の狹隘にして破毀せる校舎を改造せよと奨むるのである、然る時は容易にして今日の衰境を回覆するや蓋し掌を覆すが如きであらう。

## （二）日本の秀才

日本の卒業生の多くは、判官や辯護士など法律政治に關係深きことは、前述の明治に於ける卒業生と其の發展の方向を、同うせるに在り、と云はんか、數年前に於ける判檢事辯護士試験合格者が明治に優りしは事實なりしも、晩近に至り頓に明治は優勢となり來り、日本の及ぶべくもあ



らず、然し乍ら、其多くは兩校の卒業を兼ねるもの多く、其關係を以てして恣は我校の卒業生なりと云ふも、其間蓋し奇怪なる現象を見るであらう、其オーゾリチイを早稻田の新聞界に於ける慶應の會社銀行界に於けるは、明治、日本、中央等これを辯護士判檢事界に於けるが如しである、日本にしてこれを軍人學者社會に見る、稀れに三四の主計官、二三の學者輩に過ぎないのである、

伊藤長次郎、二十六年卒業、貴族院議員、兵庫縣農會長、第三十八銀行の頭取、

荒川五郎、二十六卒業、廣島の人、本年も好成绩で代議士に出た、元は學校教員をしてをつたそうだが、随分怖ろしい先生だつたらうと思はれる、けれども心は口や顔程凄くもないらしい、今でも廣島に女學校とかを經營して居る、さればにや彼は教育上の事には大分熱心で、またよく知つてをると云ふので議會でも教育上に關して眞に委しいの

は、彼と三土位だらうと云ふ話した、また三土と彼とはよく似てをるが、閣員仲間から可愛がられるのは、最も三土は政黨の關係でもあらうが、彼よりは三土の方らしい三土は何處までも温健で細緻で可成敵を作らない男だが、荒川と來ては誰れ彼れとなしに喰て懸るので、敵を作りやすく、隨而強い味方も出来る、其差或は彼は陰險で、三土は淡泊であるとか、彼は喧嘩好きで三土は大嫌ひだとか云ふ如き、多少の噂は耳にせるも、個人的に對談するに及んで、何となく温情あり慈愛ある如く感じさせるのは兩人共同様である。

松田源治、二十九年卒業、怎うだいな飲源さんが、辯護士になつたよと相變らず飲むだらうが、此方等らみたいな居酒屋には、最う二度と跟足を運ぶまいネ、とは彼のよく出入した有居酒屋の主人公の話し、これを以て見ても彼は青年時代に如何に大酒家であつたかが知れる、彼は酒を以て勉強し、酒を以て成功した、彼はある時は牛飲馬食し、あ

る時は北城にも出沒した事が往々あるやに聞及べるが、彼のだらしなき懐中には必ず、六法全書の一冊や憲法講義の筆記位は絶えたことは無かつたと云ふことだ、斯の如くして彼は尙且つ國家試験の際に、辯護士と高等文官試験を兩方一度に取つたと云ふことだ、以て如何に當時頭腦が良かったかを察するに餘りある。

彼一度代議士に打つて出するや、忽ち當選した、而して直に天下の大政黨たる政友會に入黨した彼れ少壯にしてよく壇上の人となるも、松田曰く云々を他方選舉區民は滅茶に何でも松田と聞けば彼れに相違なきが如く、法相の正久松田をも源治松田たらしめた利益は蓋し今次の選舉などでは、效能頗る大なるものがあつたと聞いた、彼は近き將來に於て少壯大臣の野心満々たりと聞けるが、一体大臣と云ふものは爾偉いものかネと冷笑を浴びるが例なりとか、僅し彼にして眞に其意あらば、何ぞ早成を期する必要あらんやだ、記者は其根情を他人に觀破

される丈それ丈まだ幼稚なる所あるを知るのである。

栗原廣太、卅一年卒業、彼は鳥取の人、高文の試験に首尾よく及第して宮内省へと這入つた、今は宮内書記官として隆々の聲が高い、彼は人受けもよく、隨而交際術に長けてをる、先帝御不例當時の如きは、新聞記者仲間にも評判もので、彼れに依つて得た所頗る多かつたと云ふ事である、兎に角彼は官界游泳術に長じてをるのは事實で、中々私立大學位卒業して高文試験に通つたとていきなり宮内省邊りに這入るのは餘程の力がある、希くは大に自重自愛されんことを願ふのである。入東可海、二十六年卒業、金を拵へることも上手であるし、政治的活動も目覺しいとの評判を蒙つたのは、つい二三年前だつたが、此の頃は市會議員の選舉で落ち、代議士の選舉でまた落ちた、金も落ちたといふ話、落ちた落ちたが大分續いて、今は遂に辯護士入東可海となつて終つた、少し位株で金を儲けた成金黨はあれだから困ると、

江ッ子に曰はれるやうになつた、彼僥し將來大に儲け、大に活躍するの時期なかりせば、最早や彼の全盛時代は終了したものである、吾人は偏に再來の龍雲あらんことを希ふのである。

山岡萬之助、三十二年卒業、東京控訴院検事、判検事辯護士試験委員、國家試験及第後、獨逸に留學して、ドクトル、オブ、ウトリウスエの學位を貰つて歸朝した、彼は恰度早稻田の永井柳太郎と云ふ格で、新進ではあるが、學生に人氣のあるのは非常なもので、殊に雄辯會、連中は、何事でも彼に相談をする、彼亦よくこれを快諾して出来る丈の盡力をすると云ふことだ、昨年の關西や九州方面一昨年の中國北越方面巡廻演説には、挺んじて出馬したと云ふ、彼れ在學中は沈思寡言の學生であつたが、獨逸歸朝後はガラリと變つて演説が食より好きになつたと云ふことだ、元來勉強家の性だが、今も尙孜孜として實際と學理とに向つて、努力研究の歩を緩めない、學識の點に於ても、人格の

上に於ても洵に近來珍らしき人物であるとの評判が高い。

添田増男、卅三年卒業、少壯辯護士で依頼人の多い彼は、聞き及べる所では、多い日には依頼件数が五六十もあると云ふことだ、盛んなのは何より結構である、遠からず代議士にも出馬するやに聞くが、單に辯護士專業で遣り通すにした所で、此の勢ひでは人二倍の仕事は容易い事であらう、彼は常に私立大學に對して銓衡の博士を拵へようと云ふ面白い主張を持つてをる。

秋田清、三十四年卒業、秋山の後を繼いで、二六編輯長から、一躍忽ち社長の椅子を占むるに至つた彼は、元來辯護士の肩書を持つてはをるが、彼は單に權利義務を主張するを以て足れりとしな、凄味のある二六の奇抜新聞を切廻はして行くには、それ相應の才と智と膽とを要する、本春の逐鹿戦に果して彼は驍名を天下に轟いた、彼は同じく徳島で争うて落選せしめた「やまと新聞」の小野瀬とは淺からぬ關係

がある、曩に小野瀬が二六にありて全盛を極めて居た時代に、同縣後輩たる誼から延いて二六に入れたのが彼秋田である、彼は弱冠にして判検事試験に及第した位の才物であるから、幾もなく小野瀬を凌駕するに至り、遂には秋山に代りて社長となるに至つた、此事優に彼の凡腕に非ざるを証するに餘りある、蓋し彼が最高點迄を擢得した理由は他にある、彼の伯父須見千次郎は改進黨以來の名士であつて、自らも代議士たりし事もあり、爾來優に彼の力で一二人の代議士を出し得ると事情があつたからであるとの話してある、が然し怎うあつても齡ひ三十を出づる一二にして今日の地位を占めたのは確に尋常一様でない

と云ふことが知れる。

佐々木文一、二十六年卒業、辯護士、代議士、其他温良教育家の方では、外國語學校教授伊東平藏、東京女子高等師範學校教授西岡嘉藏、清國陝西省西南府高等師範學堂教授吉川金藏、學習院教授村田覺彌、

台灣國語教授上田定太郎、判事で關西大學教授の野田保規などは何れも高等師範部或は法科の出身者である、實業家の方面では、元日本雜誌社長の濱野一郎父茂は米屋町の大立物、新宿に廣大なる居宅を構へ新宿將軍と稱へらる。次は山口縣の參事會員で周防銀行の取締役周陽銀行の取締役なる林永太、三井物産の庶務課長辯護士原浩一、舊千代田瓦斯株式會社監査役、帝國運輸自動車株式會社取締役たる徳光好文、東亞火災專務取締役東多次郎、鐵道院九州管理庶務課長平田増吉、住友銀行副支配人辯護士日高直次などがまづ重だつた人々である、辯護士の方では前記の外に、宇都家政市とか、廣岡宇一郎、大西幸馬、西岐次郎、植松金章、村任太郎、染谷徳平、田島熊太、高橋順平、高橋織之助、高尾傳七、武智彌三郎、横山勝太郎、川村丈吉、西村勘之助、少壯で持に刑事辯護に精通し他日北米に遊學して大に亦成すあらんとする梅原錦三郎、静岡では大石哲哉、名古屋では佐藤知一、大阪では

石●黒●行●平、熊●本●では●廣●瀬●莞●爾、鹿●兒●島●では●春●島●東●四●郎、水●戸●では●梅●里●大●兄、台●灣●では●古●川●清●一、長●野●では●丸●山●象●次●郎、長●岡●では●丸●岡●多●鬼●二、函●館●では●高●橋●泰●な●ど●枚●舉●に●追●あ●ら●ず、要●す●る●に●他●の●私●立●大●學●よ●り●は●後●進●の●學●校●な●る●に●も●係●ら●ず●卒●業●生●の●面●を●調●査●す●れ●ば●決●し●て●他●に●優●る●と●も●劣●る●所●は●な●い●の●で●あ●る。

### (三) 學生雄辯家

日●本●の●雄●辯●會●は、學●友●會●を●も●兼●ね●て●を●る●や●う●な●も●の●で●學●校●中●最●も●勢●力●の●あ●る●會●で●あ●る、運●動●部●の●復●活●も、校●務●の●改●革●も、理●事●者●の●適●否●に●原●動●力●た●る●雄●辯●會●が●挺●じ●て、學●生●大●會●を●開●き、輿●論●の●喚●起●を●需●め●て、其●施●行●せ●し●む●べ●き●楔●と●な●る●も●の●で●あ●る、それ●故●幹●事●は●最●も●硬●骨●漢●で●な●け●ば●な●ら●ぬ、斯●る●勢●ひ●上●日●本●の●雄●辯●家●は●他●校●の●辯●士●に●比●し●て、一●異●彩●あ●る●も●の●も●茲●に●あ●る、で●あ●る●か●ら、毎●年●幹●事●の●任●命●に●就●て●は●小●悶●着●が●絶●え●な●い●の●で

ある、けれども年來の習慣上、元老幹事がこれに與る所多く結局は圓滿に解決を見るのである。

抑●も●雄●辯●會●の●濫●觴●は●と●云●へ●ば、今●は●南●米●に●居●て●三●萬●圓●も●蓄●財●し●た●と●云●ふ●大●宮●司●や、澁●合●、前●記●の●梅●原●辯●護●士、池●内●、久●松●、都●築●、相●澤●の●快●男●子●に●依●り●て●其●基●礎●を●作●ら●れ●た、落●合●は●高●文●に●合●格●し●て●徳●島●に●去●り、池●内●は●未●來●の●外●交●官●を●以●て●任●じ●て●居●つ●た●が、事●理●を●視●る●に●明●か●な●男●で●あ●る●か●ら、永●ら●く●國●家●試●験●の●爲●め●に●身●軀●を●拘●束●さ●れ●る●よ●り●は、一●日●も●早●く●活●社●會●の●サー●クル●へ●這●入●り●込●ん●だ●方●が●適●策●で●あ●る●と●覺●悟●し●て、郷●里●北●海●の●札幌●に●歸●り、暫●ら●く●札幌●毎●日●の●ライター●を●遣●つ●て●を●つ●た●が、北●海●の●地●た●る●要●す●る●地●の●利●を●得●ず●と●云●ふ●の●で、又●も●厄●介●者●は●東●京●へ●暴●れ●込●ん●だ、忽●ち●日●本●新●聞●に●入●り●豪●放●な●筆●を●揮●つ●て●を●る。久●松●は●日●外●濱●野●の●日●本●雜●誌●に●執筆●し●て、彌●次●論●を●久●ま●つ●て●を●つ●た●が、廢●刊●と●同●時●に●彼●は●辭●し●て、今●は●判●檢●事●試●験●の●準●備●に●忙●殺●さ●れ●て●を●る、都●築●、相●澤●は●杏●と●し●て●消●息●を●聞●か●ぬ

が、何れ海外へでも飛出すでろらう斯く勇士去つて、後は孤城落日の感ありしも、間もなく左の志士が現はれて来た。

猪野毛利榮、最う以前に法科を卒業したのであるが政治學を研究するとして、現在亦學校に籍を置いてをる、學生と云へば學生だが、今は二六の奇抜新聞で、高等政事の掛りを遣つてをるから立派な紳士だ、新聞社の政事記者は何れも責任が重い、社には又社の方針や主義がある、中央のやうに政友會の巾着新聞もあるし、萬朝のやうに片端から威反對と來る新聞もあるから、中々政治記者は六ヶ敷い、それでか彼は此頃メツキリと變つた、極く眞面目な人間になつた、山高でモトニングの所などは宛然代議士とでも見える、彼の缺點として人の噂によると不得要領だと云ふ點だが、これがまた彼の得意な所とも見える、彼れ儼し一々小問題に關し是非を容喙するあらば、彼を捨て去る者夫れ幾人ぞ、豪放の彼れ變的な彼れにして今日些かの敵を作るなく却つて

多くの知友を有するに至つたと云ふのは、これ蓋し彼が不得要領の裡に問題を葬り去るからではあるまいか、と云ふのは詰り度量が廣いからでもあるだらう、彼が鬪太き頭と、獅子のやうな眼光は如何にも野獸らしく、生の馬肉でも噛む様な風手だが、否な爾でない、彼は全く意氣に感ずを男だ、感ずると同時に情に脆い男である、彼の無邪氣さは那麼もので、隨而情にも厚く往訪偶々珍話があれば寢轉び乍ら夜の白くをさへ忘れることも間々あると云ふ、辯舌に至つては藏原第二世と云はれる位だから、意氣の演説で何處迄も通すと云ふ遣り方だ、体育論から始まつて氣合術に終ると云ふのが、彼の最も得意とする所で、時に或は危険思想や、陣笠政治家を罵倒することもある、今は二六に、新聞社は英雄の隠れ場所だと云つて潜龍に私淑してをる。  
齋藤徳造、口から先きに生れたと云ふのは蓋し彼が如きであらう、面語乃ち雄辯を成してをる、何處までも才子肌で、風采頗る雅致に富む、

早くより妻君を引連れ、能く遊び能く學んだ男だ、彼は一杯の酒でまづ酔ひ、二杯の酒で駄洒落を出し、三杯の酒で長唄を謠ふと云ふ學生外交官テツキリと云ふ男だ、猪野毛の如く膽力ありや否やは疑問なれど彼の感情の迸る所中々掬すべき所あり、偶々雄辯會の衰頹を憤慨し三千の學生に檄を飛ばした如きは空前の出來事であつた、彼は山陰の但馬に生れ早くより政論を好み、上方に來りて相場に手を出し、忽ち中轉して金は何うせ天下の廻りものと諦め、大阪街上に財布を叩付けて遙る／＼東都に上つた、斯くて彼は知らぬ顔の半兵衛を定め込んで短い袴に角帽を冠つて孜々として勉強した、前科者は忽ち逮捕されて雄辯會に引出された、彼れ辯舌よく英雄論を稱へ、音量何處までも太く、斯界の名士たるに恥ぢない、今は既に卒業して辯護士試験の準備に多忙のやうである。

吉田實、彼は早稻田の栗山の如く奔走家を以て斯界に名をなした、日

露の風雲急なるに乗じて、滿洲義軍に一臂の力を加ふるべく、馬賊の仲間に腕を捲つて座した、當時頭髮蓬々乎として後に下げ、四尺八寸の小軀は神出鬼没よく人の股にも隠れて、容易に度し難く、頗る倚功を奏したと云ふことだ斯の如き歴史を有する彼は在學中も矢張り、粗放な男で、理事を泣かせ幹事を弾劾したりして、總てが革命的であつた、それでも中々友情には厚いので、喧嘩をしても妥協策を早速講じて、絶交などするやうなことは容易になかつた、先達卒業して直ぐ上海に行つたので、未だ日は浅いから、大した報告もないが、革命の第一着歩位には這入つてをるだらう、果して何をか夢見つゝあることやら。

加藤文護、一年志願で少尉に陸進した丈あつて、性質は其顔面の如く黒く而して固い、元來文筆に巧みで、辯舌よりは或は筆の人かとも思はれる、彼を目するに狭量なり偏屈なりと云ふ人もあるが、彼は決して然らずこれ彼の極めて端正なる性質より出る誤解ならんか、彼の演

説はロジカルのに起り、而してロジガルのに終る極めて事理の明白なる論方振りなり。

辻重四郎、無邪氣と云つても彼の如き者はなからう、彼は其無邪氣の續ける迄彼の勉強は止まぬであらう彼と會談偶たピフテキを甜ぶるも、勉學の時間來れば肉の半分を残り、フオクとナイフを棄て、左様らの一言を残して去る、其の去るやまた早し彼を呼戻さんとすれば既に彼は電車中におりてまた奈何ともする能はざるに至るのだ、彼は常にさる者であるとの通用語となりて、彼を暇々する者なく、彼の舌早く往々聞分くる能はざることがある、されど壇上の彼は悠々迫らず、抑揚頓挫の妙を得流暢にして滔々水の流るゝが如しで、全くハーモニック的である。

此外新進氣鋭の士に、柏原、倉橋、三浦、足立、町田、能登、齊藤、赤江、加藤、山邊、須藤、高野など雲霞の如く押寄せ來るあり、何れも敗

けず劣らず鍛練止まざれば、他日大に都下に名聲を擧ぐるの期あるべしと信じて疑はないのである。

## 第六章 中央大學

### 〔一〕 浮沈の歴史と菊地校長

六朝李唐の文明を輸入して、八省百官の制を定め、班田の法や、租税の事、任官、兵役、社寺、宗教其他民刑行政の法規見るべきものないでもなかつたが多くは我國情に悖り、漸く弛廢して深く之が實績を積ふるに由なく、千八百四十年以來武門覇を競ひ、封建の制完く成るに及んで、法令稀少、主として不文の制規慣習を積集して、専ら之が實用を重んじ、殊に諸侯豪族各其土を劃して、政令一ならざるものがあつた、就て參考するもの多くを望む事が出來ない、或は明清の法制に則るの勢からざる



ものがあつたが歐米文明の急潮は、別に維新後法制發展の基を開いて、英佛獨の法律は主として我邦法律の淵源たるに至つたのである。

中央大學は、今を距る二十七年前、其新機運の促す所となつて、明治八年英吉利法律學校の名を以て建てられた、歲月敢て長いと云ふ程でもないが、此間時運の變遷法令の改廢は年を以て推すべからざるものがある、之がため學則、教程の釐革は屢次實行せられ、明治三十六年更に一大革新を加へて、大學の制を實施するや、普ねく英獨の法理を參稽すると共に、我邦現行の法律に就て、新に我邦に化醇せる法理を闡明して、専ら之が實地修練に努めた、二十八年法科以外別に經濟科を獨立させ、四十二年また別に商科を設けたる等、著々之が發展を劃策し、以て時勢の進運に伴ふべく努めて居る。

創立當時現校舎所在地に明治義塾なるものがあつたそれは土佐出身の馬場辰猪とか大石正己等の經營に係つてをつたのであつたが、ある事情の下に廢校となつたので磯部醇とか穂積陳重、奥田義人、元田肇、土方寧、菊池武夫、江木衷、増島六一郎外數名の設立者が其校舎と敷地とを購入して校資とし、以て共同經營の下に維持し來つたのである、其後幾多の變遷は免れなかつたが、要するに維持員なるものは前記人々が重なるもので、戸水寛人の加入された位である、遂に三十六年の七月に東京法學院と改稱して、同時に社團法人としたのである、其後東京法學院大學と改めたが、更に三十八年八月に中央大學と改めた、現在の増築校舎は四十年の十一月に竣工したもので當年恰も當校の二十五年記念式を舉行した年であつた。

始め英吉利法律學校長として其職に當つたのは、増島六一郎で、東京法學院となるや、院長となつたのは依然増島であつた、二十四年の四月になつて、増島辭職し菊池武夫之に代つた、大學制となれるも學長は矢張り菊池で、彼は過日長逝する迄其職を全うした、彼れ死後は理事たり

し奥田義人其後任者となつたのである。

法典編纂は我國法曹界の宿題であつて、既に久しき間、學者や實際家の論議に上つた、是非未決の問題だつたに不拘、政府は之を斷々乎として執行せんとし、二十三年法律第二十八號を以て民法財産編、財産取得編、債權擔保編、證據編、同年法律第三十二號を於て、商法、同年法律第五十九號を以て、商法施行條例、同年法律第九十七號を以て、法例、同年法律第九十八號を以て民法財産取得編、人事篇を公布し、民法は二十六年一月一日より、商法は二十四年一月一日より之れを施行せんとした、時に延期論者の本尊は、此の中央を中心とした連中で、實行派は政府當局並に日本、明治の兩大學一派であつた、當時の激烈なる論法振り、實に目覺しいもので、一世の耳目を聳動したのであつた、けれども遂に延期論者は美事美事仆仆されたのである。

中央大學の表向きの経過は大體那麼んげんものであるが其半面史に至つては

中々爾でない、最初英吉利法系を標榜して立つた學校に對して、陰に陽に敵對したのは今の法政の前身たる和佛専門で、佛蘭西法系を盛に主張して英法の不備杜撰なるを罵倒したものだ、それが爲め一時盛大他の比儔する無かつた中央も漸次下火となり不勢和佛に壓倒された感があつた、これを見て取つた、英法の御本家勸進元たる江木博士は、御利益御利益が禿禿げては大變と、蒼くなつたり赤くなつたりして有難サを吹き飛ばした、それが爲め效驗があつたと見えて、和佛の勢力を少からず殺ぐことが出来た、所が元來中央は餘り眞面目過ぎて、學生には怎うも敷居が高いせいか、這入つて來ないには理事者も自分乍ら困つたらしい、云はゞ殿様の商賣の様に、客が來ても其方は後から來たに依つて暫く其所に控へて居れと云つたやうな調子だものだから、忽ち明治などの眞の商賣人が現はれ、日本の様な男子らしい日本人らしい學校がポツ／＼出來て來たので、法政には一時白羽の矢を立て、威張つて見たが、それがあべこべ今度は

自分の身の上はなつた、剩へ近來著しく獨逸主義に傾いた結果が、尙は、減茶苦茶となつて、血竭き骨枯れた殘骸の感もする、それで土地建物の外、五萬圓もあつた基本財産は悉皆消失し、五六年前には學生の總員僅々四百乃至五百位に減じた、當時の菊池校長の心痛は一通りでなかつた、それで八方手を盡し品を變へて考へた末、三十九年に佐藤幹事の計畫で、高等豫備校を起した、これが抑も今日ありし中央の唯一の楔であつたのである、現今では豫備生だけでも千五百餘名に達してをるので、それ等の餘裕で一昨年改築した費用も出來たのだ、惜しむべきは兎も角も功勞厚い菊池學長の死である、されど幸にして奥田博士あるあり、學校の經營發展には些かも顧慮する所はなからう。

## 二二 中央の秀才

中央の卒業生は、明治や日本と同様に法律系に求むるの外はない、其

の法律系中の人物もたゞ懸隔があつて花井の如き飛切りの人物あるの外は、他は殆ど彼に比儔する人物の稀れなるはたゞ遺憾とする所で、其間唯人物とも見るべきは卜部とか木下とか大場とか三浦とか渡邊とか云ふ二三名に過ぎぬ、この校友は學員會てふ名目の下に組織されてをる、講師職員をして其の校友會員や學員、會員に名譽會員や特別會員の名目で加入されてあるのは、他の大學でも同様だが、中央に限つてはゴツタ混せにいろは順に加入されてあるには聊か妙な氣がする、恰も世人が見たならば卒業生としか見えぬだらう、此の點に於て聊か吾人は、古武士的遺方の中央に對して遜色ありと思はれるのである、正門の南小門に中央大學俱樂部の小札が下がつてをる、此所は同校の卒業生の俱樂部で、實業會だとか學士會、果ては在學と結托せる訴訟實習會だとか機關雜誌法理精華や法學新報などを編纂したり事務を執つたり、會合談笑したりする俱樂部で、此の種の計畫は最も適切なる事である、日本や法政などに

俱樂部てふ意味の團集所の無之はただ遺憾で、中央にして増築と同時に之を鮮明にしたのは、最も策を得たのである。

創立以來今日迄卒業生が、大約五千七百名、外人卒業生(清國留學生)八十八名程に及んでをる。

石山形平、二十一年卒業、辯護士、市内にて同業者間に腕利きの評判が高い。

稻田周之助、二十三年卒業、本大學の講師で母校の後輩者を鞭撻すべく努力してをる。

花井卓藏、二十一年卒業、彼は全く立志傳中の人である、彼れ十三才にして故郷を脱走し遙るく東京に来る、身の托すべき所がなかつたので、流浪終に築地邊の或る活版所の職工となつて僅かの賃錢を得つゝあつた、餘暇あれば其間云ふ迄もなく讀書に耽つたのである、斯くする事兩三年、僅少の蓄財を以て英吉利法律學校に入り、孜々として勉

強した、卒業後忽ち拔群の成績にて辯護士試験に及第した、時に年僅かに二十一の弱冠であつたのである、當時彼は神田邊の下宿屋に潜々つてをつたが、常に赤い女の襦袢などを着、頭髮蓬々として省みず、花井さん那麼だらしない風であなだ辯護士の試験が受かりますかい、などと冷かされてをつたと云ふことだ。

壯年に至るに及んで代議士に打て出で、一方辯護士としては花井、梅の箱屋殺しや、男三郎の腎肉事件等の刑事辯護で凛々しき盛名を掲げ、爾來彼は重大なる刑事辯護には必ず彼が關係しない事はないのである、彼が中央派に籍を置いて、陣笠政黨屋の惡臭より遠ざかり、政治家として辯護士として眞摯に活動しつゝあるは、彼の聰明なる所以にして、彼れ議會に在るや偶ま死刑廢止論を主張す、然も其論旨實に衷情を沸かしたるに足りしが忽ちにして刑法上の一問題と也天下其可否を論難するや實に急なるものがあつた、平地に波瀾を起せし彼は遂

に衆愚の爲め揉潰されたりとは云へ、彼が主張は蓋し永却に破られぬであらう彼れ又老人罪刑廢止論、不良少年遷善策等、彼が目的とする所は恒に社會國家ありて眼中個人あるなしである、竟に彼は曩に法學博士の學位を授けられ、法律取調委員を命せらるゝなど、往年見るか

げもなき活版小僧は今や法曹界政治界の宿星となつたのである。

林頼三郎、二十九年卒業、大審院検事、頼の字を見てさへ頼母しい氣がする、聞けば私立大學位出て大審院などへ累進するのは餘程の力がなければ適はぬとの事だ。

大場茂馬、二十三年卒業、東京地方裁判所検事兼司法省參事官、風采は至つて揚らないが、獨逸へも留學して來て、ドクトル、ユリスの學位もわり學才はタツブリ備はつてをるから、司法當局の重鎮をなすであらう。

岡田泰藏、二十四年卒業、辯護士代議士。

田中文藏、二十四年卒業、田中文藏と云へば其の界限で知らぬ人はない、彼は今三井物産の庶務課長兼調査課長で、財團法人三井慈善病院理事の榮職に在る。

田中武雄、二十九年卒業、熊本逓信管理局長。

中山佐市、二十三年卒業、東京府農工銀行支配人農工貯蓄銀行取締役、硝子製造株式會社監査役、北海道炭礦汽船株式會社監査役、舊千代田瓦斯會社取締役、門司興業株式會社取締役。

ト部喜太郎、二十三年卒業、天下の大政黨にゴロ／＼してをるよりは、君の氣性として、名を掲げ眼を光らせるには、國民黨にでも入黨したらば奈何、何にしても政界に於ける天下の大立物となるは期して待つべきである。

柵瀬軍之助、二十二年卒業、代議士。

木下謙二郎、二十五年卒業、彼年少にして政治を好み、家事を顧みず、

悉く乃父の遺産を賣り飛ばして二十萬金を得、之を懐にして東京に押上り、同郷人箕浦勝人の引立に依りて、進歩黨に其の名を知らるゝに至つた、彼れや太だ策を好み、志大にして盛に財を散し四方に交り、竟に後藤新平の女を其の親戚に娶るに及び、彼が功名心は炎々として燃えぬ、而して彼は後藤を通じて桂に結び、以て進歩黨の頽廢を挽回せんと企てた、彼が衷情は蓋し知る人ぞ知るので、進歩黨は曾て薩派と結托して、所謂松隈内閣なるものゝ出現を見、殆ど理想的政黨内閣として、爾來數回の組織を見るべかりしに、然も何事ぞ犬養の狭量なる、長谷場と衝突し、樺山、高島を逐ひ遂に内訌的爆發は哀れなる今日の國民黨を産むに至つたのである。

當時の事情は兎も角も、事實犬養は島田を追ひ、尾崎を陥れ、河野を迫害し、鳩山をいぢめて、自黨に殆ど人物なからしむるに至つたのは、彼れに取つて吾人の最も遺憾とする所で、情意投合は兎に角、い

ざ鎌倉の海穩かならざるに際して、走せ參すべき一致の了會さへ在りしなば、蓋し今日の如き運命に陥らなかつたであらう、木下は茲に猛然として起つた、彼は竟に元考犬養を誡首したのである、彼亦直に誡首されたりと雖も年茲に四十有三、少壯後進の彼は果せるかな、老獐大石を丸め込み、鋭敏箕浦すら彼の手に依りて、選舉界の死命を分度する迄に至つた、彼亦傑物である、今や桂は宮中に引退した、次で西園寺去るの日あらば、原、大浦、後藤、犬養、大石などの群雄割據の序幕は茲に開かるゝであらう、此の時に際して後藤の參謀として大浦、大石等を手にするを得ば、彼の前途や洵に多望であると云つてよい。

三浦逸平、二十四年卒業、代議士。

田邊熊一、三十四年卒業、日清日露の兩戰役、我國産業たる、電氣、瓦斯、紡績の三事業は最も長足の進歩をしてをる、従つて此等の事業には、武藤、和田、日清紡績の田邊を推さざるを得ない、彼は紡績

界重役中の若手で、今年取つて三十八歳だ、昨冬佐久間福太郎の逝くや、彼れは其の後を襲ふて社長日比谷平左衛門の實權を自家の掌中に握り、今や日清紡績會社を背負つて立つてをる、彼は越後西蒲原に生れ、幼にして神童の名があつた、中央を出て歸郷するや二十三才で町長になつた、時恰も總選舉に際したので、彼は率先して選舉運動を開始した時の新瀉知事勝間田稔は、之を制止せんが爲め町村長に選舉運動禁止の訓令を發した、彼は忽ち立憲治下の本旨を論じて遂に知事に迫り該訓令を取消さしむるに至つた、適々松方内閣と自由黨の提携問題の起るや、彼は新瀉に自黨支部を代表して、本部の大會に出席し、薩派と提携するの不可を論じ遂に反對黨の爲めに血の雨を降らしむるに至つたと云ふ大活劇を演じた、其時より彼は漸次政界に名を知らるゝに至つたのである、彼は到底一町長位を以て満足すべきものでない、遂に彼は縣下の自由黨から推されて縣會議員となり、盛に教員優遇や、

巡査増俸、教育、土木問題などの人氣問題を提げて勇戦したので、茲にも花役者を以て迎へられたのである。

彼は遂に縣會を煽り盡して、明治四十一年の總選舉に際して、突如として逐鹿場裡に現はれ、大多數を以て新瀉より出た、時に年三十四歳の若冠であつたのである、彼は常に自己の確信に向つて勇往邁進する性で曾て東京府が新設會社に對して、國稅營業稅の免除期間なるに不拘、府稅として營業稅を附課したる時の如き、彼は極力其の非理不當を難し、遂に之を行政裁判所に訴へて勝訴を得、新設會社に對する新判決例を作らしめたる如き其の一適例である。

### (三) 學生雄辯家

毎度會議でお馴染の花井とか卜部、又は民事辯護の三宅などの饒舌家に感應された中央にも相應に小辯士が漫延つてをる、横田千之助の弟に、

横田稔と云ふ青年がある稔の名を狂げて、ひねる君、ねじる君など、綽名されてをる、彼が錆れたる破鐘の様な聲で怒鳴る所は、ひねるに非ずんばこれねじるものである曾つて彼は校内生の意氣昂らざるを嘆き、憤然として起つた、同志の熱血漢渡邊英三を翁合して双壁並んで絶叫したのは、偶然而はなかつたのである、彼等は忽ち理事奥田義人を叩いて、四十二年の四月遂に辯論部の大改革大刷新を行つたのである、今日の辯論部あるは横田の熱血と渡邊の後押しが然らしめたのだ、横田は下野の生れで、星亨の門に學んだ男だ、兄の逐鹿などには今春も大分功勞があつたと聞いてをる、彼は相當の識見もあり理窟も吞込んで居て、彼の滋味を帯びた破鐘の聲は、聴衆を押し付け、適してをる、理論は兎も角一種のインプレッションは確に與へ得る男だ、昨年法科を出たが、尙ほ研究科に籍を置いて勉強してをる。

常田努、一般に保守的だと云ふ評判である、信州の山奥から出て來た

男で、頭が大きくて軀が倭い、意志の強い性だらう、今春中央主催の擬國會には、彼は保守黨内閣を組織して首相の地位を占めた、肥つた倭軀で演壇に上り、獅子の吼ゆる様な蠻聲で、施政方針の大演説をやらかし、八方より攻撃して來る質問に、原内相ではないが、一々肉迫、唸喊して、皮肉くる所は中々の出来ばえであつた、彼の演説は各學校や集會などに出陣するが、常に現内閣に關係する諷演説で、滑稽染みた所に特長がある、遺憾乍ら倭軀であるから、壇上の氣配が少しく物足りない氣がするのである。

米津藤一郎、横田の關係から雄辯界へ時々顔を見るが、演壇上の人といは、勿論第二流なるを免れない、擬國會では、内務大臣の榮職を汚したが、在野黨からウント油を絞られて恰度犬養對内田の幕が開かれたのだ、原内相には逆も及ぶべくもない、彼が蒲柳の質と、度膽なき態度は政治家たるの要素を缺除してをるのである、だが決して望みな



きの謂ではない、彼れにして今少し膽力を鍛へ、熱情を沸かし得ば或は然るべき地位に達し得るであらう。

其の他前田顯一郎、小川兼馬等の第二世はあるも横田の後継者たるに適せぬであらう、前田の如きは單に空論を吐露する所謂弄辯家に過ぎぬ、横田去り常田行くの日はこれ蓋し中央雄辯界凋落の日である。

## 第七章 法政大學

### 〔一〕梅博士と佛蘭西法

法政は明治十二年二月東京法學社の名を以て起つた、一變して東京法學校となり次ぎに東京佛法學校と合併して和佛法律學校と稱してをつた、大學組織となつたは卅六年のことである、校舍にしても、駿河台より錦町、更に小川町に移り、遂に現在の所在に新築したのである、設立者は、

薩埵正邦、小倉胖三郎、大原鎌三郎、堀田正忠、金丸鉄、伊藤修等の面々であるが、勿論其の中軸となつたのは、薩埵であつたのである。

校長の變遷に就ても、河津祐之、古市公威、大島誠治、飯田宏作、横田國臣、箕作麟祥、梅謙次郎、富井政章など私立大學では法政程校長の變つた學校はない、であるから随分今日迄は盛衰もあつた、其の最も盛況を極めたのは、明治廿二三年であつたらう、當時は佛蘭西主義の自由民權説が盛に唱道された時代であつたから、佛系主義を標榜して起つた同校は、恰度其の急潮の焦點に這入つてをつたから隆盛を極めたのは自然の勢ひである、間もなく英法系が盛んになつて、中央の前身英吉利法律學校とは全く對抗の有様で、全く當時は二校の隆盛時代であつた、其後學界の趨勢は漸次變遷して來て、全く英獨の法系が盛になるに連れて、同校の運命は端なくも衰微すべく餘儀なくされたのである、だが數ありし總理即ち校長中でも評判な梅博士の時代であつたから、博士は一時の

衰頹位はものともしなかつた、博士はそれで卅九年の八月に、清國を漫遊し知名の士に會見して、教育上の意見を交換したりして、肅親王、張之洞、袁世凱などの賛同を求めた結果、多くの清國留學生を吸収し得た、當時恰も日本は露國と戦つて大勝を得た後であつたから、清國などの日本を羨れ慕つて、東都に留學に来る者が幾萬だか知れなかつた、早稻田許りにも五六千は居つた、恰度博士の漫遊は效を奏して、法政に學ぶ者が多かつた、それに法政では態々速成料を設けたり、通譯を置いて清國語で教授し、講義録も漢文で配布したりしたものだから、當時は清國留學生が千五百名も居つたそれが爲め、法政では遽に潤澤を見るに至つて全く校運を挽回し得た。

然るに悲運は又もや同大學を見舞ふ事ゝなつた、と云ふのは清國政府が留學生を送るの不可なるを認めるに至つたからだ、元來清國は政府すらさうだが、一般通じて滿着性を帯びてゐるので、一時双手を舉げて贊

成いて見ても、何か一寸不可ない所を見ると忽ち急轉直下で氣が變る、清國政府の遣り方は常にさうだ、然もそれが失敗を醸すべき一大原因である。と云ふことを知らないだ、有繋梅博士の明を以てして其所には氣が付かなかつた、それが爲め却つて法政では色々な設備を施した爲めに非常な損失を招いたのだ、だが博士の事であつたから、那麼困憊は借金すれば治ると云ふので、一萬許りの借金ですつかり内部の設備を改め、高等豫備校を設け、學則を改め従來の夜間教授を廢して晝間教授となし、別に夜學部を設けたのであつた。

梅博士は單に同大學にのみ功勞ある許りではなく、國家に對しても實に功勳のある人だ、分けても我國の法典編纂に就ては實に大なる關係を有してゐるのだ、彼のポアンナードが民法を起草するに際した時も、梅博士は一々それに関係して當時不完全乍らも完成すに至つたのだ、其の後民法の改正に際しても勿論博士の手を一旦經ねばならなかつたのだ。

亦法政に於ても、眞面目な温健な人であつたから、學校の内外には殊に熱心であつた、生徒を何處までも世話をして、就職上の事などに關しては、非常に配慮されて居られたと聞いてゐる、先年長逝された時などは、誰れ一人として嘆惜しない者はなかつた、博士は餘り酒を飲過ぎるので、病氣の原因は確に酒からだ云ふことだ、博士に就て今尙ほ逸話となつて校友や學生が驚いてをるのは、一旦名刺を貰つた人の顔と名前を覺へて居ると云ふことだが、これ許りは逆も普通の人間には及ばぬ所だと噂されて居る、尙ほ博士が卒業生の發展策を講じた一端として見らるべきは、朝鮮の警務部内に法政の人物を入れた事だ、後にも述べるが、大分一異彩を放つ程發展してをると云ふことだ。

### (二) 異彩ある討論會

法政の討論會は各私立大學中でも、評判もので、和佛法學會の下に梅

博士が會長古賀廉造が副會長と云ふ組織で、一時は實に振つたものだ、學校内では、學期々々に等賞を定めて遣るのだが、就中各大學聯合懸賞討論會は、都下の呼物であつた。

常に梅博士は、如何なる事があつても、此の討論會には鉛筆と紙を以て出席し、終始テーブルに腰掛けて聞いてをる、また一方各大學からは應拔隊が押かけて盛に彌次る、それでも博士はウンともツンとも云はないで、金佛様のやうに昵としてをる、有繋に博士の手前があるので彌次隊も、レールを外れたことは云はないが、時々然り大に然らずとか、デカタンよろしくなど皮肉くる所は實に見物だ、毎度人氣演説は早稻田の選手だが、肝緊の演題には關係のない途方もない事を云ふので、滿堂の聴衆は只煙に咽せて終ふが、それでも眞面目な博士だから、何時でも選に漏れる所などは實に滑稽である、博士逝いてから、討論會は凋落の觀を呈し此の頃は一向評判を聞かなくなつたのは、怎うした事であらう。

今其の論題の一二を紹介すると、

○甲者乙者を殺害する意思を以て之に毒物を飲用せしめたり、偶々丙者

乙者と争ひ之を毆打し死に致せり、甲者の所分如何、

但し此毆打致死の事なかりせば、乙者は少時毒物の爲め死亡すべき事

と假定す (三十三年四月開催)

○賄賂として官吏に贈るべき旨を表示して委託したる金銭を消費したる

ものは、委托金消費罪を以て論ずることを得るや (三十七年四月開催)

○甲あり自己の所有地に遺棄せる幼者あることを知り、之を扶助せんと

したるに乙あり甲を妨げ之を扶助する能はざるに至らしめたり、乙の

所分如何 (三十九年四月開催)

### (三) 法政の秀才

法政は矢張り純然たる法律系統の學校であるから、判檢事とか辯護士

若くは代議士の方面に人物が出てをる、實業家就中銀行家の方面には他の私立大學に比較すると驚く程尠い、操觚界の方面にも殆ど二三に止まるのみだ、だが一つ誇りとすべきは、朝鮮に於ける警察部方面であつて、第一京城警務總監部には、亥角仲藏、中野有光などの兩重鎮を始めとして、呼子友一郎、今村鞆など警察部方面の主腦をなしてをることだ、これは全く梅博士が熱心に該方面に運動して發展せしめたのに依るのである、尙ほ朝鮮季王家事務官黒崎美智雄なども當校の出身だ、代議士も可成多い方だ中にも高木益太郎や守屋此助などは政界での呼物で、高木は例へば中央の花井と云つたやうな格である。

井田忠信、三十四年出、千駄ヶ谷の町長で、府會議員、代々木の紀井家の素晴らしい廣大な、して可なり大きいお池などがあつて、隈伯の庭園にも優る翠園に陣取つて、開けて行く千駄ヶ谷町を睥睨してをる、府會では古株で勢力もあり、熱心に政治には努力するので、何時も最

高點で當選する、風采は極く上らぬ方で、身装などは一向頓着せず、一見宛然たる田舎親父にしか見えないが、氣や頗る昂り常に大酒をあふりて、往々萬丈の氣焔を吐く所などは、何う見ても豪傑肌の男である、彼は案外教育に熱心なので、よく學校などへは足繁く出入するか、阿附使佞のへボ教員は、彼が來ると縮み上るとは笑止の極みだ。

亥角仲藏、三十六年出、朝鮮總督府警務官兼朝鮮總督府警視。

今村頼、三十七年出、朝鮮總督府警視。

畑中泰次郎、二十五年出、海軍主計中監。

畑尾健順、三十一年出、やまご新聞社の理事で、曾ては報知に永らく健腕を奮ひ加ふるに温健着實で同僚間に風評された男だが、梅博士に昵近だつたのは校友中彼が一番だと云ふことだ、常に身装がキチンとして、靴先には泥一つ附いて居ない貴公子然たる男である。

岡井藤之丞、十九年出、辯護士代議士。

神戸一、二十一年出、彼は甲州系實業家の一人だ、殊に若尾家直參の一人である云ふから、其の勢力の程も思ひ知られる、彼は文久二年の生れで、少年時代から九州邊を放浪したと云ふから、辛酸も相當に嘗め盡してをる、學校を出た後、逸平翁の知る所となつて、逸平が貴族院に出た時其の秘書役を仰せ付かつた、翁は當時東京に鐵道馬車會社を遣つてをつたが、其の紊亂は極度に達してをつた時、彼は其の整理を翁に托せられたのである、彼はそこで若冠乍らも大鐵槌を下して、冗員の淘汰、老朽者の逐拂ひをやつた、所が事務員や車掌は泣寝入りで事濟んだが、茲に困つたのは鳶人夫の始末だ、年少氣鋭の彼は鳶人足位はなんでもないと云ふ調子で、ドシ／＼首斬りを遣つた、所が案外彼等は亂暴であつた、あの神戸の小僧奴、生意氣だ殺つけるなど云ふ權幕で、神戸の家へ押し寄せて來た、彼等は座敷へドツカト構へ、一休俺等を怎うして呉れるのだいと痰阿を切つた、すると神戸は平然たる

態度で、君等は社の内情を知らんかい、今に潰れるのだよ、潰れるまで居たいのか、今潔く罷めたくないかと云ひ聞せたので、やつと納得して歸つたと云ふことだ、だがこの時の整理で、若尾は大儲けをやつたので、神戸の名はこれより愈々揚つて、今日の地位を作つた基礎は此時からだと云ふことだ、これから日鐵に迂つて運輸課長にまで進んで、大分此所でも好成績を揚げた、日鐵が國有となつてから、暫時閑散の身であつたが、彼は其後前川太兵衛や若尾の後援で、日洋毛斯倫會社を起した、前川を社長として資本金二百萬圓、彼は今専務取締役である。

竹中寛治、二十五年出、三島物産株式會社専務取締役。

谷口留五郎、三十二年出、鹿兒島知事。

夏井保四郎、二十二年出、辯護士代議士。

中安信三郎、二十五年出、代議士、京都市會議員。

中野有光、朝鮮總督府警務官兼朝鮮總督府警視。

白田卯一郎、三十七年出、横濱貿易新聞で己に其名を揚げた、やまと

新聞理事兼編輯長で、三面の小川煙村と並んで、新事件を機敏に逮へ、各社を出し抜いて以て夕刊に報道する怪腕は、寧ろ凄味がある。

矢島浦太郎、三十八年出、代議士辯護士。

古賀庸藏、三十二年出、代議士辯護士。

後藤文一郎、三十三年出、辯護士代議士。

木戸豊吉、二十三年出、京都府會議員、代議士。

三谷軌秀、十九年出、代議士、公證人。

守屋此助、二十年出、日本出の少壯代議士で政友會の松田源治と云つたやうな格で、守谷は國民黨だが、中々議會ではシマツタ演説を遣る男だ、よく議案調査會で、民黨から六分科逡信だとか鐵道などに關する部長などを押し付けられる所などを見ると中々莫迦に出來ない、近

年中に長足の進歩するのは火を靦るよりも明かだ、

高木益太郎、二十年出、彼は日本橋の真中に生れた、本春の逐鹿界には前回通り最高點で當選した、市民の代表で彼が一番だと思ふと、東京市にもまだ莫迦が澤山あると思はれる、幼少より常盤小學校に學んだいけあつて、江ツ子のチャキ／＼だ、それ程彼は義俠兒ではあるが、此の頃の義俠兒は當になるやうで餘りならぬ、己れの利害を打捨て、弱者を苛める強者や、世の理法を破る驕者に反抗して一肌脱ぐのが仁俠ではないか、なせ自分の厄介になつた常盤が揉めた時知らぬ顔の半兵衛を定め込んだかそれが分らぬ、柿沼や大内や前川はては西澤などの有力者をさう虞れたのか、彼は或はあるものゝ爲めに楯となり矛となつてをると云はれても何等辯解の辭はなからう、彼が議會で薩長の藩閥を歎き、會て市會で魚河岸の死活問題を絶叫したのは、これ一は彼が盾であり一は矛であるからである、聞け彼は常に恁う云ふ事を云

つてをる、一木喜徳郎が歐洲を漫遊して歸るや、直ちに日本橋魚河岸の死活問題に就て評論した、一木の意見の詳細を聞くに次官桂内閣の實際たる彼が東京の事情に迂遠なること實に言語に絶してをる、假りに一木の理想を實現せんか、市内幾千の小賣魚屋は遂に餓死して終はねばならぬ、民情に通じないこと履冠轉倒の愚論である、其の實際家に及ばざるや甚だ遠い、這れ畢竟、彼等が詰込的の官學教育を受け、世態人情に於て具さに辛酸を嘗むることをしないで、藩閥によりて、鰻登りに局長次官と成つたからである、政治は輿論の實現である、輿論を壓迫して獨斷政治を行ふは藩閥政治に非ずして何である、今や政黨内閣の樹立を得たる以上は、病膏盲に入れる此藩閥の根を斷つの大英斷に出づることを要する、之が當面の急務は積弊の久しき文官任用令を改正して彼等に大鐵槌を與ふるのは、實に憲政の大任務である、嗚呼藩閥を到すものは、果して誰乎、政友會か將た國民黨か、否、五千

有餘萬の我國民にあるのであると云つて居る、だが鰻登りなるが故に民情に通じないとは皮想も太だしい愚論だ、彼の論旨一見ただ期を得、當を得て居るものがあるように思ふが、然し薩州と云ひ、長州と云ふ吾人は決して薩長に左袒し、藩閥を呪ふ意味でもないが、實際に於て全然實力に缺けてをると云ふことは云ひ得ない、既に富に於て關西九州は東北の枯渴に優る數倍人智亦た九州地方より入りしもの決して尠くない、茲に至つて彼は何が故に藩閥を捉へ專政を叫ぶの意果して那邊にあるやを了解するに苦しむのである。

杉原榮三郎、四十二年出、井田忠信と同じ府會に居る彼は議長でもあり、勢力からも、風采からも井田以上だが、人物としては井田の方が上の方を見て居るし、杉原はせゝこましい様な所があるやうな氣がする、併し杉原は市や府の醜類とは異なつて超然主義を守つてをる男だ。

### 〔三〕 學生雄辯家

近頃出た眞下や打田が在校中は群を他校に抜いた、其の辯力の發揮は寧ろ凄味があつた昨年卒業した福岡良郎は辯力風采兼備の男で遂に小松某に見込まれて、其の婿養子に引張られた、それで小松良郎となつた、小松と同時代の清水郁、後藤國彦と共に、法政の三人男と謳はれた、後藤は添田辯護士の所に厄介になつたから、二六へ行きそれから讀賣へ轉じてまた讀賣から太平洋通信社へ迂つた。

田熊福七郎、栃木縣の生れた、身体は小さいが、才氣英發の方で、學業の傍ら文藝雜誌を發刊してをる、彼は幼少より幾多の辛苦を嘗め盡しただけあつて、仕事の出来る男だ、同校の發刊雜誌「法政」の生るるに就ては不尠盡力されたといふことだ、常に古賀警保局長を親分としてをるから、地方の青年團や、自治制問題には明るいものだ、壇上に立



つても口云ふ所は青年團などに關することが多い。  
久野八十吉、福岡縣の生れ、感情が強く寧ろ熱情家だ、おまけに瘦せ男でさもセンチメンタル然としてをる、だが性質は極く正直で友情にも厚い、得意の宗教論は何時も乍らよく聞ける、身体にも似合はず聲を張擧げるが、故意にやつては彼れ熱狂兒には却つて背水の陣と云はざるを得ない。

宮下庄太郎、長野生れ、態度豪傑風を帯びて、小事には拘泥しない性だ、お馴染の演題は地方自治改革論である。

秋元保一、青森の生れで、温厚篤實、よく云へば貴公子然としてをるし、悪く云へば道學者とでも云ひたい、無論辯論は好きだ。

篠原政雄、私立萬能論の泰斗は彼が事だ、攻撃擲揄演説が得意で、琵琶には至極堪能だ、まづ多藝多才の男だ。

## 第八章 東京帝國大學

### (一) 帝大起原と貢進生

東京帝國大學の起原を尋ぬるに、徳川幕府の審書取調所に濫觴し、後洋書取調べ所と稱し更に開成所と改稱し、維新の際之を朝廷に收めたのに起因してをる、仍ち明治元年年二月に、東京第四大區神田宮本町元の昌平校(舊幕の建設)を學校とした。是の時知學事正權判事及一等二等三等教授を置いて、山内容堂をして知學事に任じて、開成所醫學所(舊幕府の醫學校病院等をして總理せしめた、醫學所病院は、共に第五大區小區神田和泉町(舊藤堂邸)に在つたのである。

明治二年六月に昌平校を改めて大學とし、知學事正權判事及教授等を廢して、大小監博士助教等を置いた、七月には大學校(昌平校、開成校)

より教官兩三名を選んで議員として集議院に出した、十二月には大學校を改めて大學と稱した、因りて東京開成校名を大學南校と改めて、東京醫學校の名を大學本校と改めた、是の特別當大少監正權大少亟大少主簿及大中少博士大中少教大少得業生大中少寫學生大中少寮長等の官を置いたのである、尋いで松平春嶽を以て大學別當に任じ學務を總判せしめた。王政維新の初首として教育の事に下すと雖も創業の際學校の位置とか、學務の施設共に幕府の舊を錯取し、未だ一定の制を立るに暇なく、其の今日の所謂明治教育の緒を開くことに至せる者は實に是の時を始めとしたのである。

明治三年七月に諸藩に令して生徒を選択し以て大學南校に入らしめた、之を稱して貢進生と云つたのである、大藩と小藩とは選擇生の數が勿論異つて、大藩はすつと多かつたのである、生徒の數は約九十名内外で、教師は多くは外國人であつた、當時學生の讀んだのも原書が主で、「法學

大意」など云ふ書物は多く珍重されたのである、八月には大學南校より英學佛學の上等生數名を選抜して海外に留學せしめた、此中には故小村壽太郎侯なども居られたのである、十一月には大學東校より生徒を選抜して海外に留學せしめ、醫術の研究をせしめた、四年には政府の命で、大學を廢して文部省を置いた、そして教育事務を總判し、大中小學校を管掌せしめた、此時太政官出仕江藤新平を以て文部省大輔に任じたのである、詰り大學南東校の官員をして文部省の事務を轉補せしめたのである。當時大學の管するところは南東校を除くの外、大阪に開成所理學所醫學校があり、長崎に廣運館醫學校あるに過ぎなかつた、其他海外留學の生徒を管理するに止まりて、未だ全國の學校に及ばなかつた、文部省が建つに及んで全國教育衛生事務を總管する事が出来るやうになつた、九月には南東校の教則を改めた、それは正變二則、正則とは業を授くるに外國教授を以てしたもので、變則とは業を授くるに日本教授を以てした

ものである。その區別を廢して一に歐米の成規に模倣し業を授くるに必ず外國教授を以てし、其の能く其の任に堪へたるものを各外國に募りて其の員を増し、更に生徒の内より俊秀なるものを抜いて海外に留學せしめ、以て他日學士輩出の洪益を圖るに在つた、因りて茲に従前の貢進生なるものを廢して生徒の學力を試験したものである。明治五年八月には愈々學制藩布令が出て、府縣設立の學校を廢した、詰り舊弊に因襲を知らしめんと欲したからである、即ち諸校の名を改めて東校を第一大學區東京醫學校と云ひ、南校を第一大學區東京第一番中學校と云ひ、洋學所（二橋通元の開成所）を同第二番中學校と云ひ、大阪開成所を第四大學區大阪第一番中學校とし、大阪學校を第四大學區大阪醫學校とし、長崎廣運館を第六大學區長崎第一番中學校とし、長崎醫學校を第六大學區長崎醫學校とした、それから明治六年に一般小學中學に對する學制令が出たのである。

斯くの如く、明治三年頃から出來た貢進生は其翌四年の九月廢せられたのであるから、其の期間は洵に短い、従つて其の當時貢進生であつた人で、知名の人としては極く少數であるのは自然の順序である、穂積陳重だとか、故小村壽太郎侯、松井廣吉、菊地大麓、箕作博士、などの諸氏は、當時の所謂貢進生であつたのである。

### （二）各科の盛衰と學生の今昔

帝國大學！如何に崇嚴に吾人の耳朵を衝くであらうか、そも博士とは何者、學士とは果して如何なる者であらうか、神樣然たる博士學士、怎うしても只の人間とは受取れなかつた、世の中にありとあらゆるものは、博士に據りて隱秘され、博士に依りて政治にまれ、宗教にまれ、軍備にまれ、教育にまれ悉く指命されるものかの如く考へられてをつた、今日に於ても吾人は決して博士を偉くないものとは思つて居ない、けれども

官學の問屋たる帝國大學に對する感想、學士博士に對する考へは、少年時代とガラリと變つたと云ふのは事實である、だが博士論と博士推薦に關する内幕は次項に特述するに依つて、此所には除いて直に學生氣質に關する一斑を述べよう。

學校に對する現代社會の傾向は、帝國大學にも見られる、それは果して何であるか、曰く學校は職業教育所であると云ふそれである、現代社會が多くは生活難に追はれ、就職難に困憊するの結果、子弟の一身を氣遣つて、卒業後は早く衣食に有就かれる様にと、それには廻遠い迂遠極る文學士や、宗教哲學、倫理、などを喋る道學先生には眞平御免といふので、帝大へ進ませるならまづ、法科と云ふ所で卒業後は外交官にでも成れば極上、少し危ないと思へば、工科へでも入れて、工學士なら収入は充満だからそれが最も安全だと云ふのだ、文學士などにはお前決してなるものでないヨと、其の母に言はれるのが、抑も現今の通語で、それも道

理見よ近來は文科や理科が著しく頽廢して來たのを、それが證據には現在帝大の各分科で學生の在籍數を見ると、法科が二千二百人、工科が六百五十人、醫科が六百三十人、文科が三百三十人、農科三百四十人、理科が百四十人と云ふ割合であるのを見ても、如何に文學や理科が萎微して來たかが思偲ばれる。

然りながら、今より十年若くは十五年以前の帝大の有様は中々爾ではなかつた、當時の覇權は全く文科にあつた、固より法科の學生はと云へば亂暴過ぎて、酒に酔ひビール壘を放り擲げたり辻傳の朦朧を相手に握合ひなどをするのは法科の學生に定まつてをつて、元氣の方から云へば法科は依然威張ては居たもの、物質的とか精神的とか盛に論じ合つた其の當時故、時勢よりして、矢張宗教哲學倫理などを攻究してゐる文科の勢力は大したもので、其の他は到底お話にならなかつた、元來帝大には各分科の俱樂部會として、法科の綠會、醫科の鐵門俱樂部大學病院

に入る門が鐵門なるより取る、文科の學友會、工科の丁字會なるものがある、運動會などの競争場裡には、此の會が最もよく團結を發揮される、それが近來に於ける短艇競漕等に於て各鎬を削ると云ふのは、抑も鐵門俱樂部と綠會で、文科の學友會などは殆ど問題にされて居ない、所が、名は憚るから多くは云はぬが、今の青森縣知事の竹内千代三郎などは十年前の法科の運動狂で、當時毎度乍ら文科に敗を取り太だ衰頹してをつた綠會の名を揚げたのは、確に竹内一派であつた、當時は學科の方のみならず、運動部の方に於てさへ文科は奮つてをつたもので、法科は常に文科に敗を取るべく餘議なくされてをつた、然るに近來文科の体たらくは怎うした事だ、吾人は文科の萎微枯渴を憤慨するよりも、寧ろ當時の面影を追懐して、轉た一掬同情の涙なき能はずである。

少くとも高山樗牛の跋扈時代は、尾崎紅葉や姉崎正治、大西祝、森林太郎など帝大の内外相呼應して一世の文界一時に動搖めき、如何に世人

の耳目を聳動したかは、吾人の茲に瞻仰して措かざる所である、樗牛逝き、紅葉没するに及んで、時勢は年を追ふて推移し、有繫漫爛を飾つた文壇の紅華も哀れピラミットの榮華の跡を弔ひ流るゝナイルの澁りを啣つ心地ぞするのである彼等が血を搾り骨を削りて書揚げた作品の事を思ふと、奈何に没常識なればとて、文部の文藝委員審査に篩掛けらるべく出作して、以て行賞の雲行を懸念するが如き現代の文藝界の下落は、實に斯界の爲め痛嘆の極みである、文部省が宿星坪内逍遙を文藝功勞者として表賞したるは、國家として個人の文藝的人格を認めたるものなれば、吾人も之を諒とする、乍併其の作品に至りては必ずしもさるものでない、文藝本來の價値は自ら其の作品の中に在る、そは敢て等賞を附して囁々すべき性質のものに非ずして、國民が之を読みこれを味つて、其中に抱容されてをる價値の如何によるものではあるまいかと思ふのである、此の意味に於て例へ文部は該委員中に第一流の審査員を聘用しあるとも文藝

の行賞は何等意味をなさぬではあるまいか、作者も作者、委員も委員、文部も文部で、吾人は諦れてものが言へぬ、斯んな有様であるから現代に於て一頭地を扱いた作品を見出すのは殆ど絶望と云はねばならぬ。

以上は些か話が横道に這入つたが、要するに一般文學界が疲弊して來たのは争はれぬ事實で、讀賣に這入つて客年逝かれた木山文學士などが、二十五圓の月給に就職すべく三年かゝつたと云はれて居つたが、今は全く那麼もので、文學士のみならず、法學士でも醫學士でも有り餘つてを、人の噂では就職に困つて居る學士が本郷邊に、二千人餘もゴロ／＼してをると云ふことだ、まさか二千人もあるまいが、二十五圓じや詰らない、二十圓位の端金では嫌だと云つて會社へも銀行にも行かないでをる者が千人内外は確にあるらしい、文科の方でも此頃は茗溪派に喰込ん中等教員に這入り込むのが十中八九、此頃は小學校に迄喰込んで來た、けれどもこれは一方から見れば其だ好傾向であつて、實力奮闘の社會で

あるから、ドン／＼働くのが宜しい、俺れは學士だなんて云ふ氣位ばかり高いのは結局野暮な話しでそれでは何時迄経つても社會は容れて呉れぬ、文學士の新聞記者となり、中等教員となり、小學教員となると云ふ勢ひは、一步發展した考へであるといつてよからう。

けれども變れば變る世の中ではある、十年以前の學士と來たら、嫌が應でも政府へ厄介になられたのだ、敢て私立會社や私立學校の飯などを喰はずに濟んだ、偶ま一人位會社に法學士でも這入ると幸ひ、よう御座んなれと優待して、俺れの會社には法學士が一人居るから、萬事はこれで安心と吹聴したものだ、今では法學士一人世話して貰ひたいと云つたつて、ファン！また二拾五圓位欲しいといふのか、じや缺員があつたら其の時の話しにしよう位の挨拶だ、従つて學生の氣風も大分變つて來た、以前の大學生中には随分苦學をして、俸を挽いて迄僅少の學資を拵へて勉強した者も少なくなかつた、當時の大學生は威具面目で一日も缺かさ

ず登校して講義を聞いたものだ、近頃聞及べる所では三回生位になつても、講座へも出席せず、それかと云つて下宿で勉強するでもなく、友人を訪問して歩いて、珍談や法螺噺に耽つて二年も三年も試験を受けないでゐるものが大分あると云ふことだ、音楽や骨牌に耽つて粹な交際を需めコスメチックでステッキ赤靴の高襟先生も時々見受ける、時勢が時勢だから逆も以前の様に俸を挽いたり勞力を消盡しても到底那麼僅かの賃錢では學資の一部にも足りない、第一身体が堪らないから、近來では爾う云ふ者は一人も無くなつたし、土臺餘程の金がなければ大學教育は完全に終れない、特に醫科などでは四回邊りになると、一寸とした器械の買入許りでも四五百圓もかゝるから、自然爾なつたのもまた無理ならぬ事である。

法科邊りでは、教科書と云ものは殆どなく、大概筆記で通すのである、であるから其の筆記なるものが彼等の唯一の虎の巻で且つ又將來に於け

る彼等の武器であるから、最初の中は大切の筆記を眞面目に缺かさないう様に書取るが、遂には那麼大切な筆記さへも書取らないで、友人のを借りて誤魔化して置くと云ふ情け者もあると云ふことだ、それらは自分の氣に喰はぬ教授に當ると講義最中に靴擦りと云ふことを遣るのだ、それは靴を床に擦つて音を立て早く止めると云ふ暗示を與へる信號である、そしてそれ等の徒は自分に關係ない講義振りの上手な奇抜な事を云ふ教授の講座に潜り込んで、ニヤ／＼笑つて面白がつて聞いてゐるのが常だ、其の話しを下宿へ歸つて來て雑談會議に持出すのだといふことである。

學生の氣質が官學系丈あつて、帝大に關係ある者は一も二もなく衰ゆる、法科で評判教授は美濃部達吉で、神様のやうに尊敬してゐる、秀才と云ふ秀才には咸齊しく尊敬を拂ふやうになつてゐる、客年の選舉區改正問題で學生の討論があつた、來賓として來たのは高木益郎に安達謙藏の兩人であつた、安達代議士の大選舉區制論に對する、美濃部教授の論

が小選舉區制の下に大分皮肉つた安達主張論擊破演説であつたにも係らず、自然の情でもあらうが、學生が附和雷同したのは外目乍ら見苦しく見えたなどは、官僚系に養はれる學生だけあつて、流石に本性を發揮せずには居られなかつたらしかつた。

### 二三 帝大の實驗所

帝大には學生の實驗や、觀測に當らせる目的を以て教室内外の諸所に測候所や實驗所が設けられてある。

東京天文台、理科大學に附屬し、専ら天象及編曆の事業を司り、且大學院及理科大學々生の實地授業の用に供する所である、逓信省の依頼で東京郵便電信局に正午時を通報したり、陸軍省の依頼で毎日午砲發射の時刻を號砲主務所に通報したり、毎日の天氣豫報を觀測、發表したりするのである。

帝國大學植物園、矢張り理科大學の管理で、面積が四萬八千八百餘坪で小石川白山御殿町にある事は世人の知るが如くで、學生研究の爲め日々標品を大學に送り又は學生自ら園に望んで研究の材料の資に供するのである、且つ一般來觀者にも入園を許可されてをる。

帝國大學臨海實驗所、相模國三浦郡三崎町に在り、明治二十三年に出来たもので、大學院學生や理科大學植物學々生をして海產動物の實驗に従事せしむる所である。

家畜病院、農科大學の構内に在る、臨床講義及學術實驗に須要なる患畜を入院せしむる所である。

大師河原果樹園、果樹園は神奈川縣橋樹郡大師河原村にある、面積は一町四反歩で、從來農科大學内にあつたが、土質栽培に適せざる故、二十六年本園を購入したのである。

房州清澄山林、農科大學の所管で、其面積は三百三十六町步餘、房州海



岸天津町を去る北一里餘を隔つる清澄寺の近傍にある、海拔約三百米突で遙に南洋に面してをる。

醫科大學附屬醫院、帝國大學醫科大學構内にある學術實驗及臨床講義に須要なる患者を入院せしめる、精神病科の臨床講義は巢鴨病院の患者を之に充てゝある。

#### 〔四〕博士物語

十人十色様々の世である、博士號を貰はんと運動したり阿附便佞を事したりする曲學者もあれば、折角推薦までされても有難迷惑だと辭退する者もある先年森槐南以下五人が博士に推さるゝや、其中の一人、夏目漱石は此紙片一枚がと云ふ調子で突返した、博士號は其時宙に迷うたのであるが、一方博士連を不尠憤慨せしめたのも事實だ、それも無理はない、博士の貫目が天秤に掛つたのだから。

花井や鶴澤の様に二三の例外はあるが、今日の博士などは、十中八九は學閥に依るものが多い、醫學や法學の方には比較的少い方であるが、文學の方には怎うもそれが多いやうだ、矢張り文學者は一番センチメンタルで偏狭で頑固のやうである。

一体帝大側の學風と云ふものは、一般に偏してをる、大學教授などで外様や、天降り學者を容易に入れない、自分の手下に思ふよふになる者を入れる、侃々諤々の主義主張ある好適子を煙たがつて、手を横に振るのだ、詰り何んでも自分の説に盲従させようとする惡弊風が確にある、博士號にしても矢張り同じ事だ、温良に忠僕を四五年遣ればすくなれる、随分樋口龍峽だとか、佐々醒雪だとか云つて實際學才は博士にしても耻かしくないやうな者が澤山あるのだけれど、怎う云ふ雲が蓋ふてをるのか、まだならないやうだ。

文學側の最もよく門戸開放された時代は何と云つても、二十九年の高

山樗牛時代で、柿崎正治とか建部遜吾、桑木嚴翼、内田銀藏、原勝郎、瀬川秀雄など皆一度に此月桂冠を得たものだ、然し此頃は名も知れない連中がどんく／＼なるのを見ると、何だか博士の價値も安くなつたやうな氣がして來たから、爾門戸開放を勧めたくもないが、要するに數の多いのを尊ぶべきでもないから、可成鼎の重いやうと吾等は望むのである。

博士になるには、論文を提出してそれが通過するのと、大學總長の推薦と、博士會の推薦とである、何でも一番博士になり易いのは、京都大學の教授ださうで、京都大學は面白くないから、誰でも行くのを嫌がる、乃で其足止策として博士の折を報酬に呉れるのだ、博士になりたくば宜しく京都に行けなどと云ふてをつたさうだが、實際は中々さうでない、今は却て九州帝大に推移した傾向がある、何れにしてもそれらは益々よろしくない傾向だと思ふ。

某文學士が實話として慙う云ふことを云つてをる、文科に博士が少な

いと云ふことだが、それは事實爾かも知れぬ、早く言へば情實だ、堂々たる帝國の最高學府であるから、那麼ことは無からうと思ふが、其實内幕に這入つて見ると中々さうでない、往年讀賣新聞が教育界の羅馬法皇と題して、二十餘日に涉つて、其腐敗墮落を攻撃したことがあるが、その弊風は未だに改らない、それは博士推薦事情の一例で云つて見ても分る、外の分科の方も聞いてることもあるが、今は特に文科の方について云はう。

試みに大學の事務室に行つて見給へ、學位が請求者の論文が、こんな(手眞似にて二尺高位に)積んである、而も夫が審査未了のものばかり、怎うして世間の人達は、かうも博士號を欲しがるのか、不思議で堪らない、そこへ行くと、こつちから與へようとした學位を駄々を捏ねて突ッ返した夏目漱石はえらいものだ、遠慮する程價値のあるものでないと云つて、受取つた三宅雪嶺にも面白味があるが、併しそれは幾らか世間体を飾る詭言の

やうにも取れば取れぬ事もないので、結局は矢ッ張り、取らぬ人の方がえらく、取つた人の方がえらくないやうにも思へる、その中に火事でも起つてその書類でも焼かねば善いがとも思ふ。

なせ那麼に論文を溜めておく、そこが所謂情實の有る所だ、まあザツト云つて見ると慥うだ、Mと云ふ男がある、此男は大學時代の秀才で、恩賜の時計も貰つた程の人物で、洋行などもし、今は大學を始め、二三の學校に出てをるが、學識から云つても、經歷から謂つても、モウ博士に成つても宜い頃だのに、未だに論文が通過しない、それからモウ一人Kといふ一學士があり、これも大學時代の優等生で、洋行もし、今は直轄學校の教授をし、其專攻學科については、慥に斯界のオーソリティーなる價值があるが、是亦論文が通過せずにある、つまり後者の方は前者の方が通過しないからのもので、其他の論文は皆その御相伴を食つて、今に停滯してゐるのだ、然らばナゼM學士の論文を通過させぬかと云へば、

老教授の思はくで、「自分に關係あるものを博士にすれば、世間の口はうるさい、それにマダ年が若い」といふにあるらしい、聞いて見れば成る程一應の道理はある、併しよく考へて見れば、これは下らぬ理窟で、やはり情實的辯解に過ぎない、眞理の探究を天職とする老博士が、口さがなき世間の下馬評を氣にするやうでは駄目である、又年が若くて博士にできぬとならば、六十七十の老朽學士でも、論文を請求さへすれば、直ぐに博士にする積であらうか、莫迦なと云ひたくなる、かうなるとMが老教授に關係あるは、幸か不幸か分らなくなる、彼も此關係さへないなら、最う疾くに博士に成られたのかも知れぬ、これだから吾輩も論文などは出したくとも出せなくなる。

之について面白い話がある、兎に角此頃博士に成りたて、今賣れツ兒になつてゐる男に甲といふものがある、此男は何でも論文を出してから小十年もかゝつたらう、それで此男の道づれで博士に成つた者で乙丙

丁の三人がある、此時などは猛烈な活劇があつたと聞いて居る、それは甲が、主査の某教授に、根氣よく猛烈に突貫し、「なせ僕の論文を握り潰してゐるか、なせ早く僕の論文を通過させないのか、なせ僕の進路を妨害するのか」など、それはく聞かれぬ醜態で肉迫した、然るに一方主査教授の胸になつて見ると「彼奴は平素から氣に食はぬ男だ、論文も自分の目から見ると爾上出来でない」と思ふたから、態と今少し今少しと延びに延びて六七年に及んだ、茲に到つて甲は益々焦り出し、愈々狂ひ始めて、追撃は愈々猛烈となり、若し愈々通過をさせんとあらば「某教授は後進の發展を妨害する者だ」と言觸し、時宜によつては排斥もし兼ねまじき氣勢を示した、ところで甲の背後には有力な政治家も控へてゐた、併し甲は其人までも利用する氣があつたか無かつたかは疑問であるが、さにかく尋常一様の手段ではなかつたらしい、こゝで鳥渡吾輩の意見を挿むが、當時の甲の論文はさう強く出る丈あつて、餘程能く調べ上げたもので、

或は主査教授の博士論文より優れて居たのであつたかも知れぬ、さて話が前に戻るが、某教授は甲の肉迫に恐れたか、或は背後の勢力に恐怖したのか、その邊のことは好く分らぬが、兎に角こんなことが動機となつて、甲の論文は通過し、彼は芽出たく文學博士に成れた、君なども見たらうが、甲が「當時〇〇〇で有名な〇〇博士と意見を異にするは遺憾です」と語つた談話が某新聞に出てゐたのを、甲にして見れば、なにしろ自己一代の心血を注いだ大論文が七八年も、握り潰されてゐるのだもの、この位な痛罵が、其口から出たとして、さう咎められもされないではないか、それで此甲が通過したために、乙丙丁三人は餘りグズられずに通過し、こゝに一時に四人の文學博士が出来た譯さ、怎うだ恁麼事を聞いたら、僕等が博士論文を出す氣になれぬも無理はからう云々と語つた。

### 〔五〕 帝大の秀才

流石は帝大である、卒業生に知名の人が多く、比較的腕揃ひなるは後世太だ虞るべしである何々書記官、何々參事官、何々縣知事、何々教授と、中流若くは中流以上に於けるオーゾリチーは彼等が悉く覇權を握つて居るので羨望するに餘りある、けれども吾人の不思議に堪へざる一事は、外でもない次官や局長迄には難なく進がむ、何故か大臣となると實に寥々たるものである事だ、文部には以前濱尾、菊池、外山など間々見る所ありしも其他近來に至りては小村伯曩に外相となり、這次内田入閣したるが如きに止るのみである、將た又各省の高等官の多くは彼等の占むる所となつて居るが、大臣となると却て政黨屋より來れるもの多きは、太だ奇異ではないか、然も這次の政黨内閣樹立の如きに至つては、事甚だ重大事に屬し、果して園侯内閣が好結果を生むに於ては、彼等に取つては將來最も虞るべしと爲さざるを得ないであらう、然も桂公殿中に退き民黨、政友を歴して勃興するが如き日あらば、桂に次ぐべき寺内内閣

の前途や頗る危きの感なき能はずである、果して然らば局面は全く展開して、所謂眞の官僚系なるものゝ存在や何處に需むるであらうか、比較的重任の位置にあつて、而かも帝大系の粹を聚めてゐると稱する外務にして、果して從來の如く往々不評の誹詆を蒙るが如き事一再ならんか、大臣系統の命脈はそれ奈何にか激變を來すやも圖られぬのである、此の意味に於て、吾人は直截に私立大學に對しても、又帝大に對しても、速かに卿等が頭腦に蟠れる、無用なる官學私學てふ差別の觀念を取去らん事を勧むるのである、官學私學の是非を云々するの弊害は吾人の茲に辯難すべき必要なけれど、儻し夫れ果して此の官學私學てふ野暮的考を全く一掃し得るの日あらば、帝大系はより以上に、私立系はより以上の地位に到るや明かである、吾人又これに對して別に議論もあるが茲に筆を擱して直ちに出身名士の月旦に迂る事とする。

小村壽太郎、九州木分の人、夙に大學南校に學び、後米國に留學し歸

來して司法官に出仕し轉じて外務省に入つた、資性剛直不羈、多年辛酸の苦境に處して敢て屈せず、何時しか陸奥外相に識られて忽ち一翻譯官より拔擢せられ、政務局長、外務次官、全權公使等に轉歴榮進して、第一次桂内閣成立の日擧げられて外相となつた、第二次桂内閣に於て再び其椅子を占めた、其間東洋の風雲危なるものあり、動もすれば帝國の安危に關せんとした、外政折衝の難蓋し容易でなかつたのである、終に日露國交の斷絶を見るや、而も能く時難を排して、戰果を收め得たるもの、日英同盟、日露協約、日韓併合等威侯の心血を瀝盡せるものである。

陸奥伯の功業は條約改正に在つた、而も其所謂相互對等條約なるものは、法權の獨立を果し得たるのみで未だ以て稅權の回舊は及ばなかつたのである、侯小村の事業はこゝに遺されたのである、陸奥は東洋に於ける帝國の國威を世界に認識せしめて一半の宿望を遂げたのである

が、小村は國運隆興の奔流に掉さして、益々帝國の位置を世界的たらしめ、以て陸奥伯の遺業を繼承して遺憾なく完了したる感がある。

元田肇、十三年卒業、大分に生る、鳩山の易簣に依つて、奇果を得たるもの二人あり、一を長谷場とし、一を大岡とす、前者の文相となり、後者の衆議院長となる、誰れか豫想し得るものがあらう、元田の拓殖局總裁たりしは、多少落ちこぼれを拾ひたるの感なきにしもあらねど、元來鳩山と云ひ、長谷場と云ひ、大岡と云ひ、元田と云ふ、これ自由黨系の人物に非ずして、咸悉く他より輸入されたる者である、元田は度量大ならざるも、實直にして且相當の識見を有する點に於て長所を認め得るであらう、今や彼は大臣に非ずして總裁の位置にあるも原、松田に亞ぐの名望を有し、長谷場、大岡よりも黨員の信用厚けれど、何となく衆と相距る一步の感がある、而して其の主なる原因は彼が資性比較的廉直にして、他と共に功利を貪るの念急ならざるに由るであ

らう、世或は彼を目して狹量と云ふ、而かも彼は政友會の如き烏合の衆を率ひて、商賣的根性を發揮すべく餘り莫迦らしきを感じるのであらう。

加藤高明、十四年卒業、愛知に生る、小村と駢進して外交界に頭角を露はし來つたのは加藤高明と林薫である、加藤は日英同盟の先觸れとなつたと云ふのを誇りとなし、林は同じく此同盟締結の代表者たるを以て世目に映じたが、林は年輩よりも學問よりも小村や加藤の先進者である、最も若きは加藤で、彼は三菱の後援あるを以て、小村よりも早く官界に知られたのである。

西園寺前内閣に於ける加藤は、頗るお手並冴えぬ未路を示したが、彼は心竊かに小村を凌ぐの氣がある、ので、身を持する頗る高く、傲然として黨界の僚友を睥睨し、三菱の富と英國仕込の新智識を鼻にかけて幾多の反感を買つた、偶々鐵道國有問題で閣議に反抗し其職を抛つ

の止むなきに至つたなど、彼をして云はしめば主義の爲めに殉したと辯すべきも、一方閣僚間に於ては同情を喪ひしものに由る事勿論である。

加藤の名を穢したのがまだある、最も太だしきは彼が島田三郎と横濱で選挙の競争をなし、拙なくも悲惨なる最後を遂げたるの一事である、加藤の智島田に如かざるにはあらねど、彼の人格が結局島田より劣等であつたのである、外交上の馴致や、情勢に通曉せる事は敢て小村に劣るものではないが、徳望の缺如と、氣骨の冴えざるは、小村をして獨り功名を専らにせしめたる第一の原因であらう。

三崎龜之助、砂川雄峻、山田喜之助、岡山兼吉は十五年のクラツスメート、三崎は當年政友會の名士香川縣の水呑百姓の子、親は草鞋を賣つて生計とし、何時迄も改めなかつたと云ふ有名な話がある、砂川、山田、岡山は咸辯護士として名を成してゐる。

江木衷、博士の名よりも、美人欣々女史の名の方が評判ものだと聞く、

欣々女史あつて始めて博士ありと云はうか、果ては博士なきも欣々女史は在りと云はうか、兎も角も博士の元氣や到底當年の面影なしと云ふべしだ、横濱で加藤高明と同じ運命に陥つた、奥田義人や石渡敏一も同じ出の十七年戸水寛人、岡野敬次郎、平沼専一郎、鹽谷恒太郎、小松謙次郎、大島久満次、皆二十一年卒業、戸水は帝大教授時代に日露風雲急なるや政論に容喙し有名なる彼の七博士の一人であつた、曾て暫く日大に理事たりしがシマリなき遣り放しの彼は代議士となつて出た、平沼は日大の理事、曩に民事局長より園侯内閣にて次官となつた、小松次官は強盜に斬られた男と云つた方が分り易い。原嘉道、柴田家門、石井菊次郎、秋山定輔が二十三年出、石井は次官にして男爵の榮位に上り、次で今は駐米大使として赴任して居る、其の事業として録せられし所は條約改正の援助であると云ふ、彼が海外使臣としての經驗は餘りに少ない、従つて獨立人格の存在を見るに苦

しむ所だ、まづ英邁と云ふよりは循吏の資であらう、嘗て秋山が帝國議會の演壇上に登つて露探ではないといふ辯解の演説をした事があるが、事實に露探であつたか怎うかは遂に不明瞭の裡に葬られて終つた、今日となつては誰れ一人記憶を新にしてをる者はあるまい。水野鍊太郎、福澤鍊二郎、山座圓次郎が同クラスの二十五年出、福原は伊勢永島に生る、大學卒業後は遞信省に入つた、其後内務省神社局長に轉じた、次で奈良や鳥取の警部長をやり三十一年に文部省に入つた、彼は何處迄も蠻骨で一見洒々落落、常に邊幅を飾らず、煤烟色の麥藁帽と兵隊式の短靴とは誰も知らぬものはない、無能文相と稱せらるゝ長谷場の配下に彼れのあるは好對照で、文部の一切は蓋し彼の手腕に待たなければ運動が出来ないのだ、近頃帝大總長後任問題や義務年限短縮案とか八釜しい問題が持上つて居るが怎うなることや、義務年限短縮は逆もこれは出来ないから安心だが、帝大總長は誰れが



なるだらう、山川が来るか、櫻井事務取扱が陸進かこれ見物である、山座は外務で曾て倉地と共に新聞記者間に謳はれた名聞家だ、彼は蠻骨漢で小村に私淑し、小村また彼を見る所大なるものなりしと、加藤高明と相容れざる山座の肌合は、將來却つて彼れに望を囑するに足る、餘り圓滿を求め過ぎる倉知の將來よりも又有望であらう。若槻禮次郎、這次の桂公、後藤男一行の露都訪問に隨行した、官僚派の少壯で應ては仲小路等と共に大臣の榮冠を得べきは疑いないであらう。寺尾亨、福岡の人、長兄の壽は矢張り博士、末弟の徳は學士、一家の光榮羨望の至りだ、清國革命騒動以來彼は花形役者たるべく、赤門教授から逃げ出して、昆崙の山、洞庭の水、彼の前途は洋々たるものがある、彼は有名なる七博士の一人で、霸氣に富み、性極めて磊落、常に口言ふ所は海外施設或は外交の諸問題である、學者にして氣概があつて、思ひ切りのよい彼の遣方は掬すべき所がある、梅謙次郎、河村讓三郎、

飯田宏作、掛下重次郎、古賀廉造、渡邊暢と同時の十七年の出身である。一木喜徳郎、内田康哉、早川千吉郎、林權助、林田龜太郎、咸廿年の政治科出身、一木は前文部次官の岡田とは兄弟で、法政局長官として名を揚げた、内田は外務大臣で清國通として然かも清國動亂に伎倆を振ふべきであつた、然るに今春議會の豫算委員會の席上で犬養木堂の爲めに、斬つて斬つて斬りまくられ、爲めに内田は顔色蒼醒め唇さへブル〜！ふるへてやつと秘密委員會の幕で救はれたとの話しだ、早川は云ふ迄もなく三井家の大黒柱である、巨擘中上川彦次郎の逝くや三井家に大打撃を與へたのである、三井の總番頭には誰れがなるかと云ふことは、管に獨り三井部内のみの問題でなく東西の實業界に普ねく取沙汰せられたのである、波多野承五郎、朝吹英二などは年數上まづ物色された、然るに其後任には後進の早川千吉郎を擧げたので世を擧げて意外の感に打たれた、彼の器固より大藏省の官吏たりしを見れ

ば、民間の事業に経験なきは勿論にして、其の今日あるは蓋し彼が信任を博せる井上侯の推薦があつたからである、波多野も亦井上侯幕下の一人であるが、人に愛せらるゝは遠く早川に及ぶものでない、それで波多野は總番頭に漏れたのである、加ふるに波多野は三田派の一人で益田孝の如き高商派や、朝吹、波多野の如き三田派は當時の状態としては到底三井王國の大統領たる資格を缺くものばかりであつた、それで三田派の波多野を中上川の後釜に据えるのは、再び二黨派を作るものだと云ふので、中立派の早川が三井王國の大統領となつたのだ。全權大使としての林、衆議院書記官長としての林田、何れ劣らぬ花形役者だ、時勢は三日見ぬ間の櫻の譬へ、十年鳴かず飛ばす、日比谷の一隅に春夢を貪るよりは、翰長少しは飛躍を試みては如何にや。床次竹次郎、鹿兒島出身の二十三年卒業、曩には宗教利用問題で大分宗教界の物議を起した様だが結局お茶飲み話して三教利用などは、今は

頓と忘られて終つた、内務省は随分三つ兒にも劣る莫迦らしいことを遣るものだと、吾人は思つて居たら、果して彼醜醜結果に終つた、けれども床次彼れ自身は若しも彼の問題が、閣員や原邊りから來たものだとしたならば、随分不幸な譯で、全く犠牲になつたものだ、或は爾かも知れぬ、吾人は床次の人格より斯くあるべく思ふのである。

阿部守太郎、二十七年出、曩に清國公使館に二等書記で令名あつたが、小村伯の外相となるや都合よき活字引だと云ふので、本省に引入られた、條約改正には調査主任で大分心血を灌いだと聞く、石井の大使となり倉地次官たるに及んで、阿部は政務局長となつた彼の肌内田の多血質と合はざる所あり、往々意見の衝突を見ると聞いてをる、彼の氣や蓋し山座と同じく小村に私淑せる所尠からぬであらう。次に醫科の方に付て書いて見よう。

侍醫頭岡玄卿、(九年出、)濱田玄達、小金井良精、(十三年出、)三浦守治、

高楠順次郎、中濱東一郎、片山芳林、森林太郎、(十四年出)岡侍醫彼の如く榮華榮譽を嘗め忽ち急轉直下して醜名を天下に曝露せる者は恐らく稀れであらう、先帝御不例前後の彼が不評は普ねく天下の知れる所なれば、吾人は茲に多くは云はぬのである、森鷗外と云へば軍醫總監とは實以て受取れぬ、彼は醫學博士で文學博士だ、何だか吾人はドコカ彼の風采が、自及された乃木將軍に似てをる所があると思ふ、近頃は若返つて、壯者を凌ぐ作物がドン／＼出るには恐入つたことだ。青山胤通、(十五年出)北里柴三郎、(十六年出)青山は黒死病で死に損ねて、却つて位一級を贏ち得たと云ふ珍らしき幸福者だ、北里は細菌學の泰斗として世界に誇るべき人物である。井上通泰、醫學者には變り者が多い、鷗外の様に醫者で軍人で文士で小説家と云ふやうに、通泰先生もはべりびりの歌人なるは誰れも知れるが、彼れが醫學博士だから驚かざるを得ない。腹式呼吸で賣り出し

た、二本博士は三十五年出だ次は工科だが餘りも馴染はない。高峰讓吉、(十二年出)デアスターゼの發見者として有名だ。下瀬雅允、(十七年出)日露の戦役に敵軍をして心膽を寒からしめた下瀬火藥の發明者、惜しむべし博士は一昨々年故人となられて終つた。眞野文二、今の工科大学が虎の門に在つた時代の卒業生だ、小松次官が強盜一件で名を知られた如く、一文部の實業學務局長たる眞野は參謀本部前で俥上電車に轢かれ危き一命を取止めたに依つて世の同情を一身に集めた、近頃山川九大總長東京帝大に來るあらば、山川の後任たるべしとの噂とり／＼である。次は文科に移る。和田垣謙三、(十三年出)奇抜な博士だと聞いてをる、講義振りも時々諧謔が混り、ラツバ節さへ作ると聞いた、彼がユーモアな性格は噓や奇談珍話があるだらう。井上哲次郎、(十三年出)演説も上手だが、第一手眞似が甘い、博士は

極く平民的で學問には權威があるが交際には決して角を立てない、博學、宗教上の第一見解は怎うしても博士に據らねばならぬ、けれども博士は或る意味に於て信仰より醒めて來たのは事實で、博士の國體論は一の宗教的臭味がなくなつた。

木場貞長、十三年出、嘗ては文部省に秘書官をやり専門學務局長もやり次官ともなりて伊藤内閣の爲め盡せし所尠からざりき、彼が眞面目なる性格は單に貴族院議員として葬られ去らんとするも、眞に小學校教員の爲め盡せし文部の役人と云へば蓋し彼が如きであらう、彼は現在も尙ほ且つ小學教育國民教育加護の加慮は去らぬのである。

坪井九馬三、十四年出、西洋歴史の講座は彼れの外には人がないとかで、今だに講座は受持つてをるが、學生自殺一件から、所謂坪九馬問題とて、彼の首を早く斬れなごど一部の學生や新聞などが大分騒いたが、何だ譴責位で濟んだのかと馬鹿くしかつた、それでもキマリが

悪いと見えて、學長の椅子は退いて、上田萬年が後釜に据つた。

加藤弘之、南校以前の修業者で、法文二種の博士號を有してをる、第一期文科大学長として令聞高かつた、老いて益壯なる彼は實に帝國學界の大元老である、進化論や國憲論を唱道して、耶蘇教を蛇蝎視し、また常に靈魂絶滅説を稱へて、靈魂は吾々の肉体の死滅すると同時に無くなるものであると云つてをる。

有賀長雄、十五年出、文學士にして法學博士の學位を有するは、有賀の外天野爲之である、これ等は自ら其學ぶ所を變じたものだが、今日の如く學科組織が嚴密でなかつたからである、高橋作衛や中村進午などと共に國際法には熱心で、昨秋清國動亂に渡清したが其の功名はまだ著者の耳にしない所だ。

高田早苗、(十五年出)天野爲之、(十五年出)前者は早稻田の學長で後者は早稻田實業の學長だ、兩人共早稻田大學の所で述べてあるから茲